



学びを通じた女性の社会参画事例集

平成 28 年 3 月

文部科学省



# 学びを通じた女性の社会参画事例集

## 目次

○調査の概要	5
○学びを通じて地域活性化や地域課題解決に取り組んでいる事例	
1 小林真弓さん（「ねっこぼっこのいえ」を拠点とした子育て支援）（北海道札幌市）	6
2 吉田恵美子さん（住民主体のまちづくり、災害救援や農業再生）（福島県いわき市）	8
3 阿久津裕子さん（「地域楽集館」を拠点とした高齢者学びの場）（栃木県宇都宮市）	10
4 時任和子さん（子育て母親支援、地域のイベント活動等）（神奈川県横浜市）	12
5 岩室晶子さん（まちを元気にする活動、人々の交流の場開設）（神奈川県横浜市）	14
6 星合深妃さん（子育て支援・家庭教育事業）（山梨県笛吹市）	16
7 加藤美幸さん（議員活動と男女共同参画社会づくり）（愛知県半田市）	18
8 小川弘美さん（子育てや集団託児、乳幼児学級のサポート）（岐阜県中津川市）	20
9 西田美恵子さん（女性農業機械オペレーターグループ、農業振興）（福岡県苅田町）	22
10 男女共同参画センターはあもにい（クマモト・ウーマン冊子化事業）（熊本県熊本市）	24
○起業や地域の活動等に学びを通じて女性が参画した事例	
11 撫養由刈さん（日本の美をトータルにプロデュース）（北海道札幌市）	26
12 木村里美さん（復興を目指した、子供、地域、学校の橋渡し）（岩手県大槌町）	28
13 荻野利江さん等6名（農産加工による起業と地産地消）（茨城県古河市）	30
14 吉岡マコさん（女性の産後のケアと、心と体の健康サポート）（東京都杉並区）	32
15 中村好江さん（高齢期の学習機会提供、人材育成）（神奈川県横浜市）	34
16 須田貴子さん（子供からお年寄りまで集える居場所づくり）（新潟県柏崎市）	36
17 小田木朝子さん（子育てママへの、「育勉（いくべん）」）（静岡県浜松市）	38
18 西村元美さん（地域の歴史伝統文化の継承活動）（三重県大紀町）	40
19 伊豆田千加さん（商店街活性化、食品開発販売、地元活性化）（京都府京都市）	42
20 吉岡まち子さん（子育てママをサポートするエクササイズ活動）（兵庫県神戸市）	44
21 茂美美代子さん（行政への提言や6次産業化商品開発）（徳島県板野町）	46
22 矢野圭夏さん（女性の仕事とキャリア支援や居場所提供）（鹿児島県鹿児島市）	48



## 調査の概要

### 1. 調査の目的

「学びを通じた女性の社会参画事例集」は、文部科学省における「平成 27 年度 男女共同参画社会の実現の加速に向けた学習機会充実事業」の一環として実施した調査に基づいてとりまとめたものである。地域の女性の学びを通じた社会参画を促進するため、地域で学びを通じて女性が社会参画し、地域におけるネットワークを形成したり、起業等の経済活動に付加価値を与えた事例についてグッド・プラクティス等を収集した。

本調査は、多様な主体により様々な場で行われている学びを通じた女性の社会参画を推進する取組状況を網羅的に把握するものである。本調査で得られた成果は、男女共同参画を推進する教育・学習の充実を図るための基礎資料とする。

### 2. 調査の方法

学びを通じて女性が地域活性化や地域課題解決に参画した日本国内の好事例について、ヒアリング調査を実施した。

調査事例の選定にあたっては、以下(4)の条件を元に文部科学省から委託を受けた調査実施者が該当する事例を収集し、「女性の学びの促進に関する有識者会議」委員の意見を受けて 22 事例を決定した。

調査にあたっては、調査実施者がヒアリング調査対象者を個別に訪問し、対面で質問と聞き取りを行った。

- (1) 調査実施者：株式会社政策研究所
- (2) 調査期間： 平成 27 年 12 月 ～ 平成 28 年 1 月
- (3) 調査件数： 22 件
- (4) 調査対象： 以下のいずれかに該当するもの
  - ① 女性が地域において社会参画活動に取り組んでいる事例のうち、特に女性の学びや社会参画が地域のネットワークの形成を生み出した事例
  - ② 女性が起業や地域の活動等に学びを通じて参画した事例のうち、特に学びによって起業等の経済活動に付加価値が与えられた事例
- (5) 調査方法： 対面による聞き取り調査（一部、電話とメールにより実施）

<主な質問項目>

  - ・学びから現在の活動に至る経緯
  - ・活動を推進するための学び（交流、学習）の内容
  - ・学びを続けていくうえでの障壁は何か、学びの継続に必要なことは何か
  - ・学びにより得られた効果
  - ・学びや活動においてどのようなネットワーク（つながり）が構築されたか

1 女性の活動概要

活動主体	こぼやし 真ゆみ 小林 真弓さん(ねっこぼっこのいえ 代表)
活動範囲	札幌市豊平区を拠点として市域全体
連絡先	<a href="http://nekkobokko.main.jp">http://nekkobokko.main.jp</a>
活動の概要	「ねっこぼっこのいえ」は、多世代交流と子育てサロンの場として、地域に開放した活動をしている。 乳幼児からお年寄りまでを対象に、多世代が支えたり、支えられたりしながら交流し、学習支援も行われている。活動は週3回で、スタッフは15人である。

【プロフィール】

- 1990年：福祉系専門学校入学
- 1994年：准看護学校入学
- 1996年：准看護師として病院勤務
- 2004年：子育て支援に関わる
- 2007年：ねっこぼっこのいえ活動スタート
- 2011年：札幌市地域子育て支援拠点に指定
- 2016年：社会福祉士資格取得



子供やメンバーといっしょ

2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

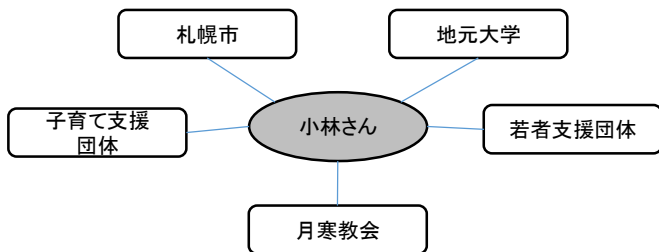
【活動の経緯】

小林さんは、若い頃から福祉系の仕事に興味を持ち、福祉系専門学校で学んだ後、高齢者福祉施設勤務、子育て支援、子どもの居場所づくり、家庭福祉など、子供から高齢者までの世代を対象に様々な現場で経験をしてきたが、その都度それぞれの現場で専門知識やスキルの向上の必要性に迫られ、学校に通い学びなおし、資格を取得してきた。

子育てをしながら、より公共的な場で子育て支援をしたいという想いが強くなり、既存の子育て支援の場でスタッフとして活動していた。そんな時、子どもが通う幼稚園から「ひろば」活動のメンバーの依頼を受け、立ち上げスタッフの一人として今の場所で活動することになった。現在は代表として運営している。

今後の夢は、赤ちゃんからお年寄りまでが、支えあう共生型のまちづくりの拠点をつくることであり、シニア世代が子育て中の母親をサポートしたり、女性が得意とする人と人とのネットワークを活用して、まちづくりのコーディネーターをするような人材になったり、自分の経験を次世代に伝えることができるようになることを願っている。

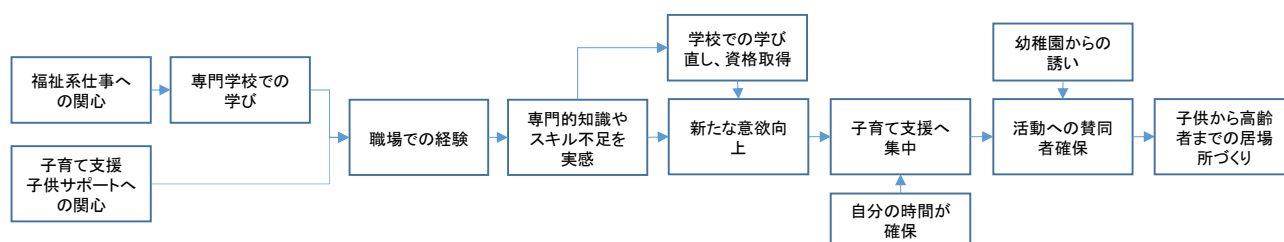
【小林さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



- 札幌市：子育て支援事業推進の連携
- 地元大学：支援に関するコンサルタント
- 子育て支援団体：子育て支援に関する情報交換
- 月寒教会：活動拠点の提供
- 若者支援団体：若者支援に関する情報交換

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

小林さんは、現場での活動をとおして、その都度専門知識やスキルアップの必要性に迫られ、独学、あるいは学校に入り、資格を取得するなど学び直しをしている。それを後押しするのは、子供から高齢者まで多様な世代の人達が支えたり支えられたりしながら交流し、子供達が遊ぶ姿が生きがいであり癒やしとなっていることである。2016年には社会福祉士の資格も取得した。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

これまでに、行政や民間研修機関や専門学校、大学等で、子育てや居場所づくり、子供サポーター等を学んでおり、通信制の学校で社会福祉について学んでいる。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】子育てだけではない自分の表現の場を得て社会とのつながりを感じるようになり、学んだことを活かすことで、さらに幅広く深く活動できるようになり自分の自信につながった。人的ネットワークも広がっている。

【障壁と改善策】学ぶための経済的負担、育児子育て中で時間の確保が困難であった。こうした障壁に対応するため、友人に子供の世話を助けてもらい、勉強会の日などは預かってもらったりした。また、会議などへは、なるべく子供と一緒に参加したりできるように工夫もした。家庭や親族の理解を得るのは困難があった。講習など、保育サービスがある時は助かると思えたが、実際には子供が嫌がりさほど活用していない。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

#### ○自分自身に対して

生きがい、意欲の源、元気になれる、繋がりが増えた、楽しみ、良い人間関係の輪の中にいる。また家族からも、一人の大人の生き方としてモデルになっており、子供は「お母さんみたいになりたい」と評価してくれている。

#### ○地域社会に対して

新聞への掲載や、大学でのゲストスピーチ、地域活動者が集まる講座やフォーラムで事例報告、大学研究者の視察や研究が増えており、市内での関心が高まっている。

子育ての孤立化予防や、若者から「大人も悪くないな」という声を聞いており、人との交流も悪くないなと思える社会を自分たちで創っていているという意識がある。

#### 【活動の課題】

- 子連れで活動をしていることで、子供への負担感への葛藤があった。経済的には何も生み出さない活動なので、夫や母から遊ばれていると思われていた。看護師の資格などを持っているので、子どもの教育負担が増す時期に入り、働けと言われることもあった。
- 子育ての期間は仲間の協力で助けられたが、女性が活動に参加したり、学ぶためには低額で安心が確保されている保育サービスや、女性が参加しやすい時間帯を工夫することが必要となる。
- 女性がイキイキとのびのび、元気に生きる街にこそ未来があると思う。
- 活動資金が不足する中、活動継続が心配である。

1 女性の活動概要

活動主体	よしだ ねみこ 吉田 恵美子さん（NPO 法人ザ・ピープル理事長、いわきおてんと SUN 企業組合代表理事）
活動範囲	福島県いわき市
連絡先	the-people@email.plala.or.jp
活動の概要	the peopleは、自分たちが住むまちの問題を自分たち自身が考え、その解決のために主体的に行動する、住民主体のまちづくりを進めることを活動の目的としており、「古着を燃やさない社会づくり」、「在宅障がい者自律支援」、「海外での貧困問題に対する生活支援や教育支援」、「皆で学びあう社会づくり」、「災害救援事業、農業の再生を目指したオーガニックコットンプロジェクト」等を行っている。NPO法人の会員数は55名。

【プロフィール】

- 1980年：大学卒業
- 1990年：任意団体ザ・ピープル設立に参加
- 1992年：ゴミ問題、古着活用に取り組み
- 1994年：海外教育支援活動着手
- 1997年：障がい者小規模作業所運営開始
- 2002年：ザ・ピープル代表就任
- 2004年：NPO 法人ザ・ピープル認証取得
- 2011年：被災者支援事業に取り組み
- 2012年：オーガニックコットンについて学び  
(信州大学繊維学部) 事業立ち上げ
- 2013年：いわきおてんと SUN 企業組合設立  
代表理事就任、いわき市政功労賞受賞
- 2015年：第7回太平洋・島サミット夫人プログラムに  
オーガニック  
コットン事業採用



おてんと SUN に参画

2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

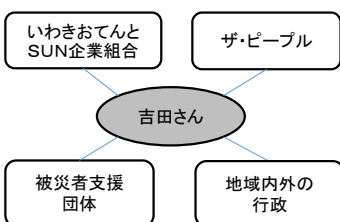
【活動の経緯】

吉田さんは大学卒業後しばらく教職につくが、その後地元いわきにもどり結婚、専業主婦となる。日々の生活の中で次第に社会に取り残されている感じを抱くようになり、地域社会に関わりたいと地元行政の女性を対象とした研修に参加するようになる。そこで学びあう仲間と出会い、自分が住む地域について何かできないか話し合う中で地域のゴミ問題に関心を持つようになった。

まだまだ使用できる衣服が無造作に捨てられゴミにされている状態に疑問を感じ、古着として再利用できないかと、地元銀行に協力を求め、銀行内に古着を集めるコーナーを設置した。こうした仲間6人からスタートした社会活動は、活動エリアが地域外にも広がり、また障害者へ雇用の場を提供している。

活動が住民からも理解されるようになり賛同する者も増えてくる中で、吉田さん自身、自分たちの事業の意味を確認するために、また、リサイクルに関する知識や市民活動の方法等の正しい情報を入手するために、家事や活動のかたわら行政や関係団体等の講座にも通うようになる。古着活用は東日本大震災でも救援物資として利用されることになるが、被災現場での救援活動をとおして被災者が必要とする物資が提供されていないことに気づき、被災者に耳を傾けることで実現した結果である。また、この時に食材確保にも苦労したこと、被害を受けた農地をどう復興させるかで地域の農業者とつながり、農業活動を救済する方法としてオーガニックコットンの栽培活動につながっている。

【吉田さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



ザ・ピープル：活動の拠点であり、多くの活動団体や仲間と自分とを結びつけてくれる存在

いわきおてんと SUN 企業組合：

市民活動を支える事業化の拠点

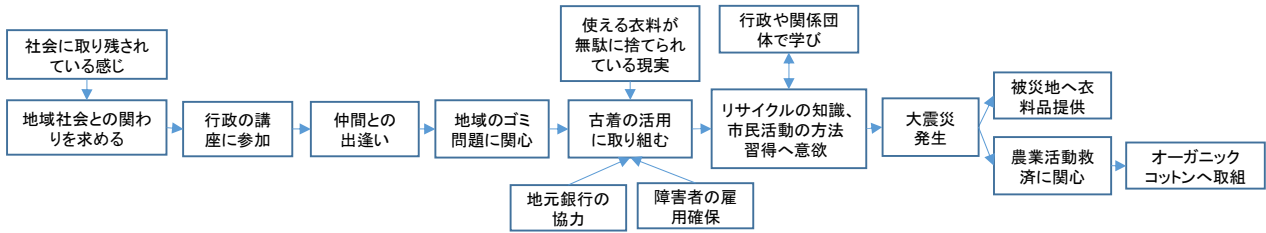
地域内外の行政：学びの提供

被災者支援団体：支援活動の連携



### 3 女性の社会参画のプロセス

【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

吉田さんは、地域に関わりたいという思いから仲間達と活動するようになり、地域が抱える問題課題へどう取り組むかを考え行動する中で、正しい知識やスキル等を得るために大学や行政、NPO 団体等での学び直しを行っている。人々の想いに耳を傾ける中で、地域が抱えている課題に気づき、自分達ができるものは何か、どのような人達や団体と連携すれば実現できるかを考え、日々、家事、活動、学びをしている。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

吉田さんは、専門的知識を学ぶために、大学や行政、関係団体等で、繊維リサイクルに関する基礎知識・現状の課題とそれに対する取組状況、オーガニックコットンに関する基礎知識やコットン栽培に関する基礎知識を学び、また、市民活動団体の運営方法や被災者支援事業に関する専門知識の習得を行っている。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】それまで閉塞感を持っていた活動への新しい展開の方向性に関する示唆を得たこと、学び合う人達と新たな繋がりが生まれたこと、知的好奇心が大いに満たされたことなどが挙げられる。

【障壁と改善策】一方、実務を疎かにする事への抵抗感や学ぶことへの経費的負担、家族への負担の増大という問題も生じており、これらを克服するために実務上の穴を開けないよう努力することと、得られた情報を団体内部で共有するよう努めている。また、家事の効率化によって家族への負担を軽減し、高齢者デイサービスなどを利用しながら、自分達の活動を理解してもらうために丁寧に説明を行っている。吉田さんは女性が学ぶことに対して次のように語っている。各年代により必要な支援は異なる。子育て中には育児の部分を肩代わりできるサービスが、高齢者を抱えた場合には、介護の肩代わりがスムーズに行われる必要があり、組織内部でも実務を離れる部分に関して、カバーできる体制づくりを含めた経済的支援があれば抵抗感は少なくなるのではないかと。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

##### ○自分自身に対して

社会的な活動を通じた人生経験の広がり、また家族にとっても女性が社会的事業を行う事への理解が高まっている。

##### ○地域社会に対して

繊維リサイクルの地域内での推進により、社会的課題解決に貢献しており、地域内では一定程度の理解と評価を得ている。

#### 【活動の課題】

○活動を継続していくには、絶えず新たな気づきが必要となる。仲間との話し合いや外部の専門家との交流は欠かせない。

1 女性の活動概要

活動主体	あくつ ひろこ 阿久津 裕子さん(地域楽集館館長)
活動範囲	栃木県宇都宮市長岡町
連絡先	028 (624) 4190
活動の概要	<p>地域楽集館は、2003年に阿久津さんが夫と二人で開いた、皆が楽しく集まり楽しさも集まる高齢者のための学ぶ場である。</p> <p>高齢社会における老化防止や健康づくりのための講座を作り、遊びを通して実現する地域交流や男女共同参画社会を念頭に「地域楽集館」と名付けられた。現在の会員は約130人である。</p>

【プロフィール】

1943年：栃木県烏山町に生まれる  
 1962年：日本交通公社入社（現）JTB入社  
 1995年：宇都宮大学国際学部社会学科入学  
 1999年：一橋大学大学院社会学研究科入学  
 2003年：地域楽集館開設



交流活動（健康麻雀）

2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

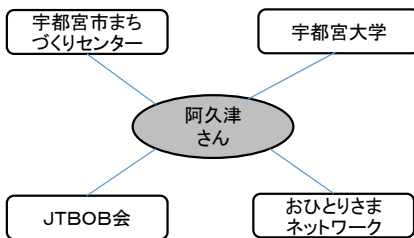
【活動の経緯】

阿久津さんは、51歳の時宇都宮大学国際学部を受験し合格した。それまで33年間勤めていた旅行会社をやめ大学を選んだ。子供も成長し、父が生前に「おまえを大学に行かせられなくてすまなかった」という言葉が後押しとなり、大学進学という青春時代にやり残したことを実現した。

宇都宮大学で4年間学んだ後、さらに一橋大学の大学院に進んだ。大学・大学院では主に環境問題を学び、修士論文と併せて、環境に無関心な人にも感心を持ってもらおうと「環境かるた」を作成している。

大学院修了後は栃木県立衛生福祉大学校で社会学の講師となり、学生達をつれて地域の環境問題にも取り組んでいる。大学校をやめた後は、いくつになっても社会に目を向けて学んでいきたいと生涯学習アドバイザーとして講演活動を行うと共に、高齢者が楽しく遊び学べる場をつくりたいという思いから、自宅を開放して地域楽集館を開いている。ここでは論語塾で生き方や思想を学び、カラオケでは大きな声をだし内臓のマッサージを、健康体操では筋力ストレッチとヨガを、ラージ卓球で身体を鍛え、今人気なのが呑まない、吸わない、賭けない健康麻雀が人気となっている。

【阿久津さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



宇都宮市まちづくりセンターまちびあ：

講演会や情報交換

宇都宮大学：宇都宮大学国際学部同窓会副会長

大学祭、出前講座など

JTBOB会：会員入会などの情報提供

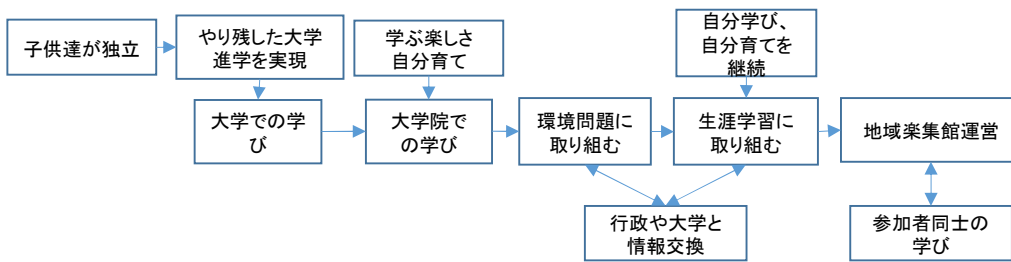
おひとりさまネットワーク：一人暮らしの方の悩み

や困りごとを話せる場、

サポートする場

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

阿久津さんは、経済的自立なくして精神的自立はないと、仕事先でも育児休業の取得や、女性セールス、代理店政策のための出向など、常にフロントランナーとしての役割をこなしてきた。子供の独立や就職等を契機に大学での学びを実現し、講師になってからはそれまでの学びを社会に還元していこうと若い学生達と地域が抱えている課題解決に取り組んだ。現在は生涯学習、環境問題に取り組み、地域の人達が楽しく集まり、学ぶ場を提供している。33年間の接客の経験が現在の活動の運営にプラスとなっていると語っているが、何よりも自分学び、自分育てはエンドレスであるというチャレンジする気持ちが阿久津さんを後押ししている。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

51歳からの大学・大学院生活では、管理型産廃処分場問題に取り組み、住民と行政の紛争の経緯、消費生活と環境破壊との関係性について学んだ。それが「環境かるた」に凝縮されている。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】学ぶことをとおしての楽しさを知り、更なる自分育てにつながっている。

【障壁と改善策】学び直しの時点では、夫の協力と全てを前向きに考え解決していく生き方をおとして、障害はほとんど無かったと語っている。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

##### ○自分自身に対して

地域楽集館での活動をおとして、高齢者になっても新たに挑戦しながら自分自身を高め健康になっていく人達を見て、学ぶことの楽しさと人のふれあいの大切さを感じている。

##### ○地域社会に対して

地域楽集館はクーポン式で自分のペースで利用できる。講座は論語素読会、カラオケ教室、ラージ卓球、健康麻雀など7つほどあり、大人達の生涯学習の場として、地域からは認知されている。口コミで域外から参加する人もいる。

公民館活動とは異なり、新たな大人の遊びと学びの場として定着しつつある。

#### 【活動の課題】

○ 地域楽集館での活動は、阿久津さんが夫の協力を得ながら夫婦二人三脚で活動をしてきたが、昨年夫をみおくり、現在は参加者の協力のもと、阿久津さんのライフワークとして続けている。

○ 楽しく学ぶ「楽集館」として地域に根付いており、参加する人達も学び続けたいと願っている。今後、この活動をどのように継続していくかが課題である。

## 1 女性の活動概要

活動主体	ときとう かずこ 時任 和子さん (NPO 法人夢コミネット代表)
活動範囲	横浜市磯子区を拠点として市域全体
連絡先	info@yumecomi.net
活動の概要	NPO夢コミネットは、子育て中の母親を支援する居場所の運営や地域イベントや講座のコーディネーター、若者就労支援等を実施している。また、地域で活動している団体について市民に情報提供するための地元の中間支援団体としての活動も行っている。現在会員数は30名だが、事業によって担当するスタッフは異なる。

## 【プロフィール】

1999年：退職  
 2000年：区に企画提案し地元での活動開始  
 サークルをつくり仲間と活動継続  
 2001年：生涯学習コーディネーター養成講座受講  
 2005年：NPO 法人設立  
 WHO・行政から事業受託  
 横浜市経済局の事業受託  
 2012年：お茶の水女子大学社会教育主事講習受講  
 横浜市市民活動協働推進委員会



講座の状況

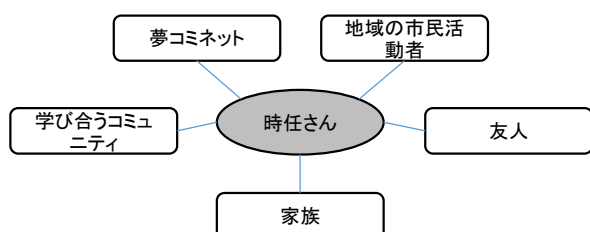
## 2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

## 【活動の経緯】

時任さんは出産を機に仕事を辞め子育てに専念。子供が小学生になり、ミニコミ紙のスタッフとして働いた。そこで調査やイベントの仕事に携わる。10年働き退職。周囲に知り合いがおらず、誰とも話さない日々が続き、外部社会とのつながりが途絶え、社会から取り残された喪失感から孤独にさいなまれるようになる。そうした寂しさから何とか脱却しようと、ボランティアなど自分に何かできることはないかを求めて地元区役所に行ったが活動の場はなかなか見つからなかった。地域振興課の社会教育主事から何をやりたいのか企画を出すように誘いを受けた。

自分で企画提案書を作成し、社会教育主事の働きにより予算もつくことになった。活動を進めるには仲間が必要となり、子どもの幼稚園時代のママ友達を誘い、子育て母が元気になるための「夢おこし」の講座を行うサークルをつくった。活動は週1回で、女性に関心をもつような新聞記事や本からテーマを選んで学びあった。また、シニアの集まりにも参加するなどして、子育てから生涯教育に至る多様な世代が夢やいきがいを持てる場をつくっていった。その後活動は地域のコミュニティ活動にも拡大していき、時任さんの活動のきっかけである寂しさからの脱却にもつながっていくことになる。

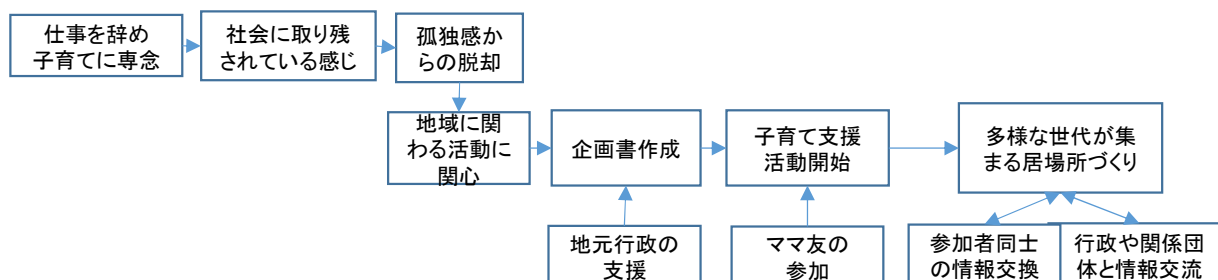
## 【時任さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



夢コミネット：自分が活動するうえでの基盤、共感しあえる仲間・同士の源  
 地域の市民活動者：支えあいとモチベーションの源  
 学び合うコミュニティ：広い視野と考え方を教えてくれる人  
 友人：リラックス&Beer の機会  
 私のやることを認めてくれる人  
 家族：よき理解者、あたたかく見守ってくれる応援団

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

時任さんが学び直しから現在の活動に至ったのは、寂しさから脱却するために、何か自分の役割を見出したいと思ったためである。子育て中の母親の思いに寄り添う幼稚園教員やミニコミ紙の仕事をしていた経験もベースとなり、現在の活動を行うようになっている。

また、その活動をとおしてさらに専門的知識を得たいと思うようになり、家庭教育や生涯学習、社会教育に関する学び直しを行い、仲間達とNPOを立ちあげている。NPO設立がその後の活動を継続する上で役立っている。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

地元行政や大学（お茶の水女子大学社会教育主事講習）等で、社会教育、話しあい学習、合意形成、コミュニティ形成等を学んでいる。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】学ぶことの楽しさと、仲間達と地域で活動することの達成感を得ることができている。

【障壁と改善策】活動に関わったり講座を受け持つ中で、専門家ではないことから批判を受けることもあったが、見聞きした中から良いものを選定し、コーディネーターとして情報発信することを心がけている。また、活動には絶えず迷いを感じているが、一方、それが更なる学び直しへと自分のモチベーションを高めることにもつながっている。

学ぶためには活動とバランスをとることと、時間をどう確保するかが障壁となる。特に子育て中の女性にとって、学びや活動などは家族の理解が必要となる。時任さん自身はこれまで家族や周囲の協力を得ることで対処できてきたが、何よりも自分自身の意識改革が必要となると語っている。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

##### ○自分自身に対して

子育て世代女性の夢の実現から地域づくり、コミュニティ活動など、活動分野が広くなり、出会う人の幅が多岐にわたり、視野も広がっている。

##### ○地域社会に対して

地域に元気な人や課題の理解者を増やすことで、地域に仲間ができて孤立の未然防止につながる。「誰もが安心して暮らせる社会をめざす」ということでの具体的な事業が発信できている。

#### 【活動の課題】

- 夢コミネットにとって、活動を継続していく上で拠点確保は重要であり、参加者も語り合う場や情報交流しあう場を求めている。事業を実施することで、その事業実施場所に事務所機能を持たせるなどの工夫をしており、参加者がいつでも学び交流できる場の確保が課題となっている。
- 現在の活動を持続可能なものとし、地域の資源となることをめざしている。

1 女性の活動概要

活動主体	いわむろ あきこ 岩室 晶子さん (NPO 法人 I Love つづき理事長)
活動範囲	横浜市都筑地区を拠点として市域全体
連絡先	info@ilt.yokohama
活動の概要	NPO法人 I Loveつづきは、大好きな都筑(つづき)～そして横浜をもっとステキにしちゃおう!と、環境・防災・子育て・福祉・経済・地域振興など、まちを元気にする取組をしているNPO団体であり、「地域コンシェルジュ」として、また横浜北部エリアの「地域プロモーター」として、多様な世代・多様な活動をする方々に対して、交流の場(コミュニティカフェ)をオープンしている。 岩室さんはこうした活動の企画から運営まで、中心的な役割を担っている。NPO法人の会員数は21名。

【プロフィール】

1980年：愛知県立芸術大学入学  
 1985年：メーザーハウス特待生になり上京。ジャズピアノ等を専攻する。以降、音楽の仕事に携わる。  
 1996年：川崎にて出産。  
 1998年：横浜市都筑区に引っ越し  
 2001年：都筑区の講座への参加がきっかけで市民活動を始める。  
 2003年：I Love つづきがNPOとなり、事務局長に就任。  
 2008年：NPO法人ミニシティ・プラス設立  
 同年「クイズヘキサゴン」の羞恥心等がヒットし、オリコン編曲家ランキング全国1位となる。  
 2010年：I Love つづき理事長に就任。  
 その他、NPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボ理事、NPO法人都筑ハーベストの会理事、日本ナポリタン学会副会長等



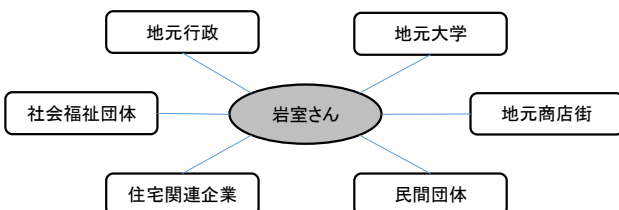
国土交通大臣賞を受賞 副理事長の川本久美子さん(左)と

2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

【活動の経緯】

岩室さんは大学の作曲科出身で、作・編曲家として多くの仕事をしてきたが、横浜市都筑区へ引っ越してきた後、専門の音楽活動のかたわら、子育ての中で自分が住む地域がどのような地域なのか、生活環境に興味を持つようになった。区役所の区民向け生涯学習活動への参加がきっかけとなり、同じような疑問を持つ仲間と出会い、都筑区の調査を行うようになった。公園の数や施設の整備状況、トイレの環境、交通事故の多発箇所等の調査を行い、地域が抱えている問題点について理解を深めると共に、手作りパネル展示などをして情報発信を行った。そうした活動に地元大学の環境情報を専門とする研究者が関心を持ち、協働で調査に取り組むようになり、同時に地域調査の方法、情報発信の方法など専門的スキルについて指導を受ける機会を得た。仲間達との勉強会もこれまで以上に専門性が向上し、岩室さん自身も、活動をさらに展開していくために、大学や行政関連施設の行うまちづくり関係の講座に出席し、ITスキルや経営に関する知識を習得し、NPOとしての組織づくりや、仲間達とまちづくりに関する事業の企画から実施までをプロデュースしている。

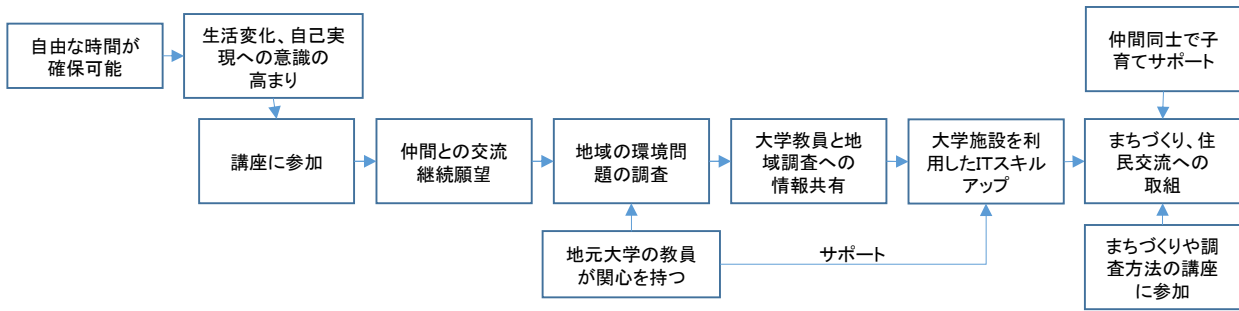
【岩室さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



地元行政：まちづくりに関する情報提供  
 地元大学：ITスキル、地域調査の指導  
 社会福祉団体：福祉活動の情報交流  
 地元商店街：イベント等の情報交流  
 住宅関連起業：活動拠点の利用  
 民間団体：イベント等の情報交流

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

自分が住んでいるまちへの興味とまちが抱えている問題への気づき、それらに対して自分なりに関わりたいと思い、同じ想いを持った仲間達と出会えたことと、大学教員から専門的な指導を受ける機会を得たことが活動を行うきっかけとなっている。

また、自分自身、地域が抱えている問題を調査していく中で学ぶことへの興味が増し、やりたいことを実現させるために、知識やスキルを求めようとする意欲が学びへの後押しをしている。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

まちづくりに関する地域調査の手法や課題を抽出するための分析、周囲に情報発信するためのITスキルについて、大学教員からサポートを受け、さらにこれらの知識とスキルを向上させることとNPOの経営について、行政関連の講座や、行政との協働をする中で職員からも学んでいる。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】学ぶことの楽しさを知り、それを多くの人に知ってもらいたいと思った。

【障壁と改善策】当初は子供連れで参加していたのでなかなか集中して参加できなかった。保育つきの講座はあったが限られていた。子育ての仲間同士、交代で子供を見るなどの工夫をしていた。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

##### ○自分自身に対して

本業の音楽活動以外で社会に役立つことがあることを知った。また、地域の中で暮らしている実感があがり、何かあったときに、地域でのつながりで助けてくれる人を確保できている。

##### ○地域社会に対して

地域を元気にするイベントやプロジェクトの企画運営、HPや広報チラシ作成など、中間的支援的な活動を行っており、地域の人達と行っている実感を得ている。活動に対して外部からヒアリングを受けることも多くなり、地域社会から関心を持たれていると感じている。

#### 【活動の課題】

○地域で活動したいと思う女性は増えており、関連する講座も多くなっている。しかし、女性が活動に参加する場合、子育てや介護など家庭環境が影響し周囲の理解が必要となる。特に保育サービスについては講座やセミナー等でも整備不足となっている。

○当団体では、こうした状況を改善するために、ITを使い、女性が自宅で作業できるテレワーク環境を整備している。

○NPOとしていかに安定した活動資金を確保するかも課題であるが、民間企業等への営業や公募への応募を積極的に進めており、自分達の活動が行政等に認められ、女性が仕事として取り組むことを目指している。

## 1 女性の活動概要

活動主体	ほしあい みき 星合 深妃さん (NPO 法人 Happy Space ゆうゆうゆう理事長)
活動範囲	山梨県笛吹市を拠点として市域全体ネットワークは圏域をカバーしている
連絡先	
活動の概要	この法人は、子育て中の親・将来、親となるものに対して、子育て支援・家庭教育に関する事業を行い、地域で共に育ち合う子育て環境づくりに寄与することを目的とする。 現在2拠点とファミサポの子育て支援事業を行っているほか、中学生のパパ・ママ体験講座にも力を入れている。会員数は現在24名である。

## 【プロフィール】

1983年：横浜高等教育専門学校を卒業  
 1984年：結婚を機に山梨に移住  
 2001年：山梨県家庭教育相談員養成講座受講  
 2002年～2004年：ゆうゆうゆう子育てランドをボランティア活動として行う  
 2005年：Happy Space ゆうゆうゆう設立  
 2010年：やまなし子育て応援ネットワークはぴはぴ設立



ママたちで結成する抱っこ sase 隊

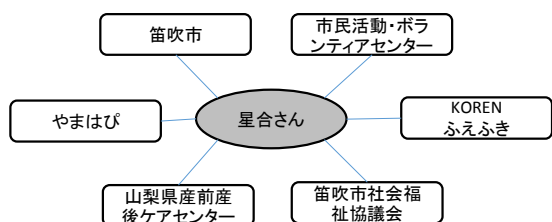
## 2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

## 【活動の経緯】

星合さんは、日々の生活の中で、地域で人間関係が希薄になったことで失われてしまった相談相手や話し相手、励ましあう仲間、親子で交流できる場や情報交換の場、学習できる場を求めている親の多さを考え、地域社会で支える仕組みづくりが必要だと考えていた。平成11年度から平成13年度にかけて山梨県教育委員会が開催した家庭教育相談員養成講座への参加をきっかけとして、そこでの知り合った仲間と「ゆう・ゆう・ゆう子育てランド」に取り組んだ。当初は年に3～4回の開催する予定で実施したが、参加する親達から毎月やってほしいとの声を受け、子育て支援グループ「ゆう・ゆう・ゆう石和子育てランド」を立ち上げ、旧石和町の理解を得て、笛吹市スコレーセンターにおいて活動、親たちの支援と子供達の居場所づくりを実施してきた。その間、星合さんを初めメンバー達は、行政と情報共有し、メンバー同士企画から活動まで話し合い、役割分担を決めながら地域で共に育ち合う子育て環境づくりを行ってきた。

現在では、まちづくりにも参加したり、地域住民や学生ボランティアも巻き込み、失われつつある地域コミュニティの再生づくりも行っている。

## 【星合さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



笛吹市：児童課（委託運営の担当課）

市民活動支援課（市民まつり実行委員会）

市民活動ボランティアセンター：活動の運営委員会

やまはぴ：代表世話人・事務局

KOREN ふえふき：市内7か所の子育て支援センターのネットワーク

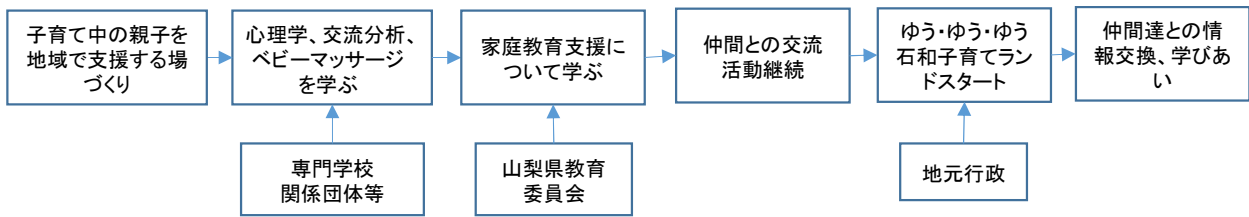
山梨県産前産後ケアセンター：情報提供

笛吹市社会福祉協議会：貧困家庭支援情報交流



### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

星合さんは、養護教諭資格を取得しており、子供を支援するに当たっては親子、夫婦の心理を知ること、アドバイスができないかと考え、親子、夫婦関係について心理学の知識を高め、その知識を通してサポートしようと、交流分析やベビーマッサージの方法を学んでいる。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

星合さんは、子育てが苦しいと考えている親に少しでも楽になれるようにと考え、また、活動の幅を広げるために、山梨県内だけでなく、県外まで学びの場を求めている。横浜高等教育専門学校での養護教諭資格取得、関係団体や協議会等での活動のための知識、方法論の取得等である。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】子育て支援をするにあたり、親子、夫婦の心理を知ること、アドバイスができたり、学習の機会を企画したり、学んだことを役立てることができた。また、学び続けることの大切さを知った。

【障壁と改善策】学ぶことへの経済的負担や、家を空けることで家族へ負担をかけることによる罪悪感等を感じていたが、家族の協力と、資格を取得し活動を進めるための新たな知識を得ることで、活動の幅が広がることへのメリットを、障壁を乗り越えるモチベーションとしていた。女性の学びにとって、保育サービスと家事育児支援の必要性を語っている。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

#### ○自分自身に対して

活動による効果としては、山梨県に嫁いできて、まったく土地勘や知り合いがない中、活動を通してたくさんの仲間や友人に恵まれたことは、財産であると語っている。また、家族も母親の活動を見て育った結果、同じ道に進んだ長女、ファミサポに登録し支援側になってくれた次女、助産師になった三女。皆子育て支援に関わって生活をしている。

#### ○地域社会に対して

笛吹市に子育て支援センターを最初に作ってから10年となり、活動拠点は7箇所まで広がり、母親たちの居場所として貢献できている。まちづくりなどにも意見を求められるようになっている。

#### 【活動の課題】

○活動を進める上で、行政や関係団体等との連携が必要になるが、自分たちが常に学び、全国の仲間たちの意見や活動にアンテナを張らなければ、新たな出会いも期待できないし、連携も無駄になると学び続けている。

## 1 女性の活動概要

活動主体	かとう みゆき 加藤 美幸さん（地域開発みちの会 会員）
活動範囲	愛知県半田市
連絡先	h_ktmk@yahoo.co.jp
活動の概要	「地域開発みちの会」は男女共同 参画社会を目指し、女性の資質と地 位の向上に努め学習と実践活動を 重ねて、地域社会の発展に寄与す ることを目的としている。そこでの学 びや経験から社会の課題に取り組 むためには地域に根差した女性の 視点が必要と、自ら手を挙げ市議会 選挙にチャレンジした。

## 【プロフィール】

1962年：愛知県豊川市に生まれる  
1988年：結婚を機に愛知県半田市へ転居  
2001年：半田女性活動連絡協議会へ入会  
2003年：県男女共同参画支援セミナー修了  
2004年：地域開発みちの会へ入会  
社会教育委員、主任児童委員、  
半田市各種審議会委員、食育活動  
2015年：半田市議会議員選へ立候補、当選  
少年補導員、自然観察指導員



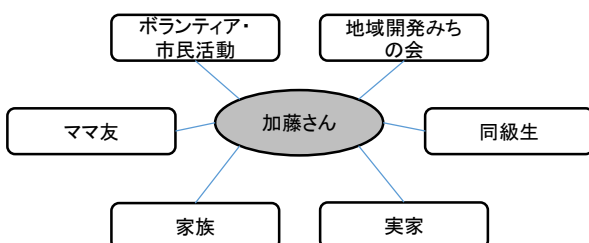
## 2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

## 【活動の経緯】

26歳で結婚し夫の両親と同居。同じ県内といえども、実家とは車で1時間半の距離は、スマホや携帯のなかった当時、自分の両親や姉妹、そして友だちをはるか遠い存在にした。妊娠、出産、育児、家事、義母の看取りと、無我夢中で20代後半をおくる。上の子が3歳頃、やっと近所にママ友ができて話をするようになり、それまで孤立しがちだった生活から、わずかながらこの土地と関われる手がかりができたように思った。

下の子が入園して学習教材の営業販売など時間に融通のきく仕事を始めた。子育て第一だが「私」のための時間と場所を求めて何か始めてみようと思っていた時、市役所の朗読講座に申し込み、視覚障がいの方達のために広報誌をテープに吹き込む活動に加えてもらった。親子ほど年の離れた女性達の真剣な姿勢や、新人の私に優しく教えてくれるなど心から尊敬できる方達と出会い、少しでも誰かのお役に立てるといふ思いを初めて感じさせてくれた。これが加藤さんのボランティア活動の原点となった。その後、興味のあることや知らない分野への無理のないチャレンジは、好奇心の種を増やし、何もしていなければ出会えなかった人と知り合えたことのありがたさを身をもって感じている。

## 【加藤さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



ボランティア・市民活動：多様な分野の人から  
学び、子供たちへ伝  
える

地域開発みちの会：男女共同参画の活動

ママ友：かけがえのない友人達

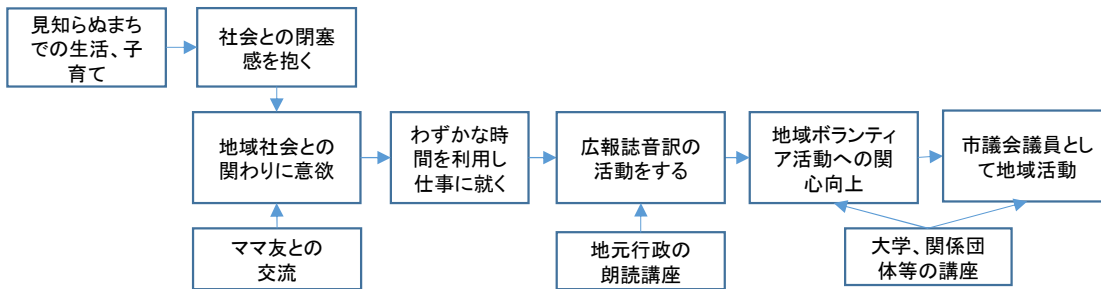
同級生：30年の時を超え復活した友人

家族：会社員の夫と子供は、それぞれの趣味や  
活動を理解し尊重しあう

実家：両親、姉妹とは離れていても気づかい合  
う

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

2003年、市から推薦をうけ愛知県男女共同参画社会支援セミナーを女性総合センターウィルあいちで受講できたことは、知識だけでなく自分自身の意識を高める機会となった。

セミナー修了生などが会員の「地域開発みちの会」では、毎年テーマを決め調査や学習会、フォーラムを開催している。2014年度の会長のおり、半田市でフォーラムを開催した。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

半田市において社会教育委員や総合計画策定委員などに任命され責任ある発言をすることで、男女共同参画の必要性を認めてもらうよう心掛けた。そのために学んだ先は、地元や他地域の行政やその関係団体、大学等様々であり、その内容は、男女共同参画、自然環境、食育、障がい者理解・共生、政治、まちづくり、郷土史などである。こうした学びへ自分自身を後押ししたのは、専門的な資格もなく学歴や職歴にも多少のコンプレックスがあったこと、興味を持ったことは、謙虚に素直に無理せずにチャレンジしたこと、いつも好奇心をもって、知ることを楽しむことなどが挙げられる。そして何よりも、男女共同参画の意義を学ぶ中で、社会での女性のあり方を変え、女性が意思決定の場へ出ることで社会が活性化することを実感した。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】生涯学習ゲストティーチャーによる郷土の歴史講座を10年近く受講し、この地方の古代から現代までの歴史や、産業（農業・水産・商・工・海運など）の発展の足取りを学ぶことで、食育や環境学習に応用することができた。何より転入者である自分自身がこの地域を知ること、だんだんと愛着が深まっていくのを実感していった。

【障壁と改善策】母で妻で嫁で主婦という立場で生きづらさを感じていたが、家庭での任務をやり終えた段階で、これからは自分自身をステップアップさせようと思った。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

##### ○自分自身に対して

議員となり、まず取り組んだのは子育て支援の本質である。自分自身の体験から、頼る人のいない孤独な育児ほどつらいものはないことを思い出した。そして子育て支援とは母親へ寄り添うサポートが大切なことを実感した。不登校の子供が増えている現状を目の当たりにし、他者や行政へSOSが言える社会にならなければと感じた。こうした活動をとおして、議員となった現在、市政のために活かせるという使命感を得ることができている。

#### 【活動の課題】

○加藤さんは、ボランティア活動で培った奉仕の精神を忘れないこと、社会参画ではまだマイノリティーな女性ならではの視点、様々な困難を抱えている市民の目線に立った議員活動をしていくことが、地縁血縁のない候補者へ期待の票を投じてくれたものであることを忘れずに、また、様々な分野における女性の地位の向上を促すために、勇気をもってチャレンジし、悔いのない人生を切り開くことを応援したいと考えている。

## 1 女性の活動概要

活動主体	おがわ ひろみ 小川 弘美さん(すくすくわくわくまあるいこころ事務局長)
活動範囲	岐阜県中津川市を拠点として周辺市町村が活動範囲
連絡先	090-7028-5455
活動の概要	中津川駅前「にぎわいプラザ子育て支援センター」を拠点として、子育て支援（相談）を中心に、集団託児、乳幼児学級のサポートや企画運営及び講師、読み聞かせキャラバン隊の活動等を行っている。会員は30~70代で約40名。

## 【プロフィール】

2009年：中津川市子育てサポーター認定

岐阜県子育てマイスター認定

子育て支援団体すくすくわくわくまあるいこころ発足 役員就任、子育てサポーター活動を始める

2011年：にぎわいプラザ子育て支援センター事業受託事務局長就任

2013年：日本スポーツ少年団認定員資格取得

2014年：地域子育て支援士二種認定

日本体育協会アシスタントマネージャー資格取得

2015年：総合型地域スポーツクラブViva!中津川を有志で設立（クラブマネージャーとして勤務）  
日本ポールウォーキングベーシックコーチ資格取得



## 2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

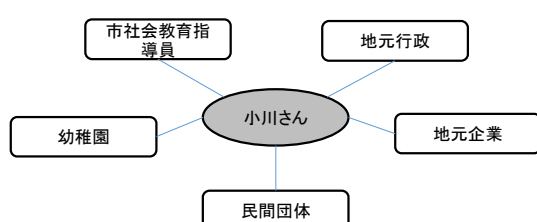
## 【活動の経緯】

子供が幼稚園に通いだし、小川さん自身、自分も幼稚園の役員を引き受け園に出かけることが多くなってきた頃、行事や役員会の際に園長より子育てに関する話を聴く度に、感銘を受けていた。その尊敬する園長が「子育てサポーター養成講座」の講師をすることになり、それをきっかけとして子育てサポーターの講座を受講するようになった。

講座は30~60代の子育て真っ最中のお母さんから孫育てをしているようなベテランの方まで、様々な年代の方が受講しており、小川さんは自分の子育てに役に立てばと気軽な気持ちで受講していた。しかし、子育て中のお母さん方へのサポート、集団託児、発達などを学んでいるうちに、一方的に聞くだけの講座ではなく、人の言ったことを否定することなく、一旦は受け止め、考え、答えを自分で見つけ出すような学びの中で、認められる自分に自信を持つことができるようになった。この講座での学びをとおして、小川さんは、保育士や教職などの資格を持っているわけでもない自分が、一人では何もできないけれど、みんなと一緒に何かできるのではないかと思えるようになったと語っている。

そして、一年間同じメンバーで乳幼児学級を企画運営したり、交流したりしている中で、このまま講座が終わるのではなく、学んだことを活かさないか、自分たちが子育てしていて困ったこと、あったらいいなあと思っていたこと、子育てに悩んで行き詰っているお母さんたちの助けになれないか、何よりも、一緒に学んだメンバーが自分たちも楽しく輝いていたいと思うようになり、集まりの会を作ろうと決心をした。

## 【小川さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



社会教育指導員：活動に関する指導、情報提供  
行政（生涯学習スポーツ課）：協働

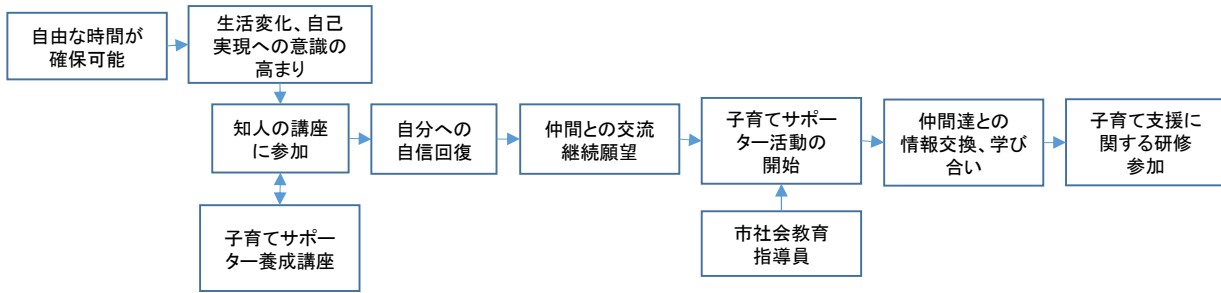
幼稚園：子育て支援に関する情報交換

地元企業：イベント等の連携

民間団体：子育て支援に関する情報交換

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

子育てサポーター養成講座へ参加してみて、知り合った仲間達と、そこで学んだことを活かしたい、自分たちが子育てしていて困ったこと、あったらいいなあと思っていたこと、子育てに悩んで行き詰っているお母さんたちを助けたいと思うようになり、サポート活動をしながらか交流し学び合う会を結成している。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

子育てサポーター養成講座の受講（平成19年10月～平成20年9月）をきっかけに、子育て相談員、子育て支援員研修会・緊急サポーター養成講座・読み聞かせサポーター養成講座等に参加し仲間が増えていく。市の社会教育指導員からのバックアップが常にあることで、情報収集や気持ちの安定を得ている。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】講座をとおして得た知識や技術、何かできるのではないかと自信につながっている。

【障壁と改善策】子育てサポーター養成講座は1年間という長いスパンであり、モチベーションを維持することは大変であった。この講座は子育てサポーターに認定するものであったが、何のために学ぶのか、何の役に立つのか講座修了後の見通しが曖昧であったため、講座が終わってしまえば一体何に役立つのか分からないという見通しや、将来の目的がはっきりしていなかったことも学びを継続する上で障壁となった。

中津川市子育てサポーター養成講座は現在8期まで継続されており、既に受講した先輩達が交代で集団託児をすることで、乳幼児を持つお母さん方も多く受講できるようになっている。まだまだ保育サービスは少なく、核家族のために子供を預けられないとか、祖父母に預けることへの後ろめたさもあり、学ぶということに関して家族からの理解を得られないなどの障壁がある。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

##### ○自分自身に対して

育児がひと段落したものの、資格も特技もない自分が何をできるか悶々としていた時、メンバーと出逢い一緒に活動し、多くのことを学び、自分に自信が持てた。また、家族や子供たちが手伝ってくれるようになり、活動の話題を家族で共有できるようになっている。

##### ○地域社会に対して

子育て支援活動は市内で認知されており、集団託児、乳幼児学級、子育てサロン講師など、行政、一般企業、団体、学校等での活動が拡大している。

#### 【活動の課題】

○すくすくわくわくまあるいこころの活動条件の1つに「子育てサポーター養成講座」の修了があり、活動に必要な知識とスキル、また学ぶ仲間との話し合いをとおして自分にとっての課題を見つけることを求めている。このため修了までに時間がかかり、新規会員の不足が課題である。

○現在、行政施設の管理を受託しメンバーが集まる場所は確保できているが、メンバー同士が情報交換し、学び合う活動拠点を確保することも課題となっている。

1 女性の活動概要

活動主体	にしだ みえこ 西田 美恵子さん（グリーンズ代表）
活動範囲	福岡県苅田町
連絡先	
活動の概要	<p>女性向けの農耕用大型特殊自動車の免許を取得後、高齢農業者などから管理できなくなった圃場を中心に、農作業を受託し、農地保全や地域の農業振興に貢献する。</p> <p>また、休耕田を利用した紫イモ栽培をおこない、町のブランド品づくりに一役買うなどの活動が評価され平成19年、福岡県「男女共同参画団体賞」。</p> <p>現在会員は8名。会員も高齢化しているため、活動は個別で行っている。</p>

【プロフィール】

- 1997年：女性オペレーター講座受講
- 2000年：大型特殊免許及び農業機械士免許取得
- 2002年：女性農業機械オペレーターグループ「グリーンズ」発足
- 2003年：小学校への農業体験学習指導
- 2005年：紫イモの作付け  
地元菓子店との契約出荷
- 2007年：女性チャレンジ賞受賞（内閣府）



グリーンズの仲間

2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

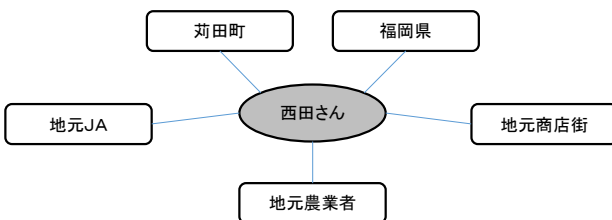
【活動の経緯】

苅田町は農業就業人口の約6割が女性で、日々の農作業の大半を女性が担ってきたが、農業機械を使った作業は男性中心で女性は補助的な作業がほとんど。農業後継者問題が深刻になる中、普及センターの声掛けで女性オペレーター講座を受講した。6名が大型特殊免許、5名が農業機械士の免許を取得した。このことがきっかけで地域の農業振興のために役立つことをしたいと「グリーンズ」を結成した。地域農業における女性の地位向上と活動をとおした会員相互の親睦も目的であった。

学ぼうとしたきっかけは、さまざまな野菜を作ったが収入がなく自分自身の収入を得たかったためと語っている。

西田さんは父が獣医で、戦時中は軍医として出征、叔父は薬剤師だった。小さいときから人を助けると言う環境で育った。当時、経済的な困窮者に貧しさから脱することを自分の専門分野で具体的に教えていた父の姿を見て育っている。例えば、農夫に牛の飼育方法を伝授するなど、そうした体験が、人を助け共に潤う姿に活かされている。

【西田さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



苅田町：グリーンズの対外的な窓口であり、地域の活動に積極的に関わっている。

福岡県：男女共同参画をとおして女性の活躍促進の情報提供を受けている。

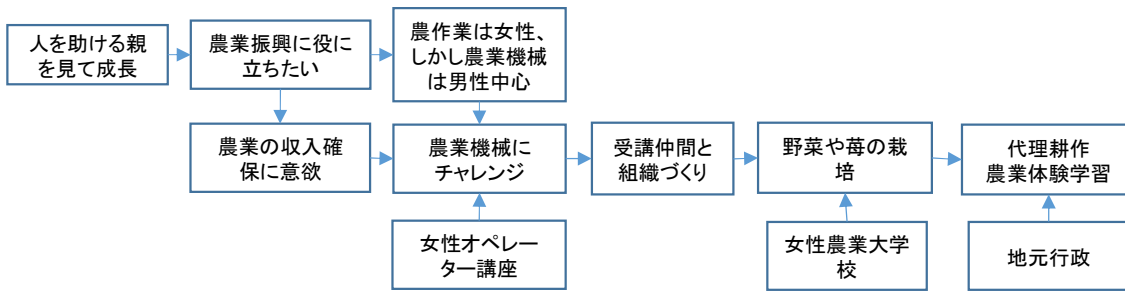
地元JA：地域の農業活動について、アドバイスを受けている。

地元商店街：紫イモを活用した商品開発で連携している。

地元農業者：休耕田の耕作や、農業技術についてアドバイスをを行う。

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

西田さんの学びに対する個人的モチベーションは、“経済的に豊かな老後を”であり、人を助け共に潤う“利他の精神”からの発想で生きる。そのための必要なことを学び、体得し、人に伝えていくことであると語っている。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

農業活動のために、農業改良普及センター（福岡県行橋市）や女性農業大学校で農業全般、野菜の栽培、苺の栽培等を学んでいる。また、大型機械免許や農業機械士免許等も取得している。

学びのきっかけとしては、さまざまな野菜を作ったが収入がなく、周囲と共に自分自身の収入を得たかったと語っている。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】学び伝えることで、自分自身の喜びと成長につながる。

【障壁と改善策】封建的な地域性の中で、女性が前に出ることによりにくさはあったが、やり続け結果を出すことで解決できる。特に障壁というものはなく、常に積極的に乗り越え和解してきたと語っている。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

#### ○自分自身に対して

苺作りでは、自分にできる技術、人の助けを借りずにできる仕事に満足できた。老後の生活に経済的余裕ができた。私自身に収入がありしたいことをする自由がある。子供たちも敷地内に住まい、孫を含めて楽しく暮らせている。

#### ○地域社会に対して

お祭りではご飯作りへの需要があり喜ばれている。

また、地区の守り隊では、草刈りや用水路の整備などを行い、県や町からの資金で男性も女性も働ける仕組みができています。時給1000円～1300円。作業場所等に批判的な意見の人もある。しかし、報酬配分があることで丸く収まっている。

#### 【活動の課題】

○大型特殊免許（トラクター）を取得したとき、男性から「おんなのくせに」とよく言われたが、田植え機コンバインを操り、男性以上に働くうちに言われなくなった。笑顔を絶やさないと気にせず、そんな人には自分から近づき相手の気持ちを変えるようにした。

○活動には全員の時間を揃えることが難しく、早出遅出とまちまちであるが、批判しないことが継続のコツ。

○女性が学ぶための環境整備については、自分がそうであったように、核家族でなく親と同居、もしくは近隣に住まい、子守りや家事を助けてもらうことが望ましい。

1 女性の活動概要

活動主体	男女共同参画センターはあもにい （「クマモト・ウーマン冊子化事業 100人女子会プロジェクト」事務局）
活動範囲	熊本市を拠点として市域全体
連絡先	info@harmony-mimoza.org
活動の概要	「クマモト・ウーマン冊子化事業 100人女子会プロジェクト」は、熊本 の女子学生が、地域で活躍する女性リ ーダー51名を取材し、冊子にまとめ るプロジェクトである。 ラジオ番組「クマモト・ウーマン」 で紹介した市民グループや、女性活躍 推進に取り組む事業所の素敵な女性 たちと女子学生たちが出会い、そして 女性の多様な生き方働き方について まとめている。参加学生は16名であ る。

【プロジェクトの経緯】

- 2012年：ラジオ番組「クマモト・ウーマン」  
スタート
- 2014年：「クマモト・ウーマン」で紹介した女性  
たちを中心に冊子化する事業を企画。
- 2014年10月：取材、記事作成に関わる女子学生を  
募集。
- 2014年11月～2015年1月：冊子制作
- 2015年2月：冊子完成
- 2015年3月：事業報告会



作成した冊子

2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

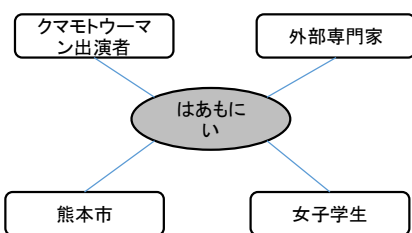
【活動の経緯】

熊本市男女共同参画センターはあもにいは、2012年よりはあもにい管理運営共同企業体（民間企業3社のコンソーシアム）で運営されており、3社の蓄積された得意分野の融合で、様々な企画が生まれ、熊本市の男女共同参画拠点として市民文化の振興と男女相互の自立と調和ある社会づくりのために、多くの女性たちの学びと社会活動を支援する様々な企画を検討し事業を展開している。

その事業のなかで取り組んだのが「クマモト・ウーマン冊子化事業 100人女子会プロジェクト」である。“社会を良くしようと活動している女性たちが熊本にいたいことを伝えたい”、“その女性たちの生き方、働き方、考え方を若い学生たちの視座で発信してほしい”、“活動・活躍している女性たちと若い世代をつなぎたい”という思いから企画したこの事業では、取材や記事作成に関わってくれる女子学生を募集。同センターが事務局となり、事務局が主催する講座（社会人基礎・編集基礎）を受講してもらい、取材・原稿作成に挑んでもらった。

主な活動内容は編集業務学習、編集や出版企画、広報活動、出版物の発表イベント企画等で、活動期間は2014年11月～2015年2月、16名の学生が集まり、事務局のスタッフや外部専門家の指導を受けながら活動が開始された。2015年3月には国際女性デーに開催する「ミモザフェスティバル」の記念講演会に合わせ、事業概要の説明と、学生たちによる事業報告会が開催されている。

【プロジェクトを取り巻く人的ネットワーク、つながり】

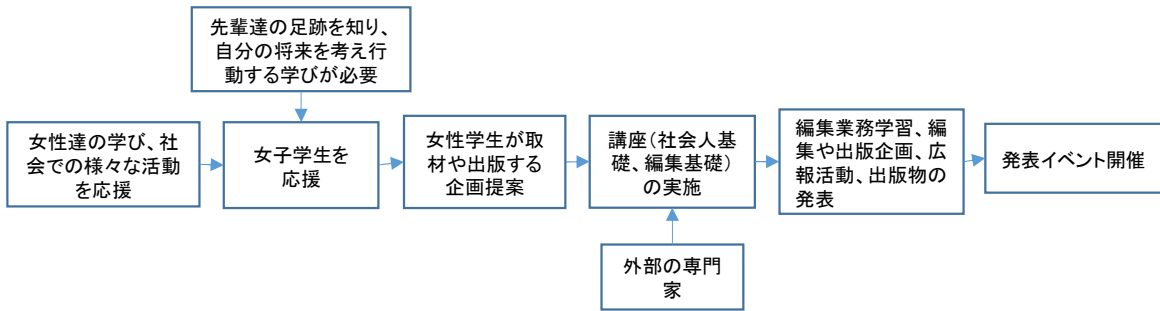


- クマモト・ウーマン出演者：各界の女性リーダー
- 外部専門家：編集の指導
- 女子学生：取材、原稿作成
- 熊本市：男女共同参画に関する情報交換や人的支援
- はあもにい：プロジェクトのコーディネーター
- 3社のコンソーシアム



### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

はあもにいでは、各スタッフがフェミニズムやジェンダーの問題について、家族・社会問題に取り組んでいる女性団体から学び、数多くの講座・セミナーを企画・運営・受講する中で学び、全国にある女性センターとの連携による研修や会議や情報交換会から学び、また、併設する情報資料室の図書を活用しながら学んでいる。今回の「クマモト・ウーマン冊子化事業」に関しては、ラジオ番組「クマモト・ウーマン」で紹介した女性たちの活躍・様々な学びについて、学生の視点で編み直すことで、新たな気づきやネットワークが生まれることを期待して取り組んだ。

#### ○活動を推進するために何が後押ししているか

熊本県における 24 歳以下の正社員の男女比は、女性が 50.6%と男性を上回る。しかしながらそれ以降の女性の正社員率は下がり、自分の思うような働き方が実現できていない人が多いという実情が見られる。女性がキャリアを積みながら活躍し続けるためには、若い時にロールモデルとなり得る活躍している先輩たちとの出会いを通して、自身の生き方・働き方を考える機会が不可欠であると考えていた。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】参加した学生からは「自分の将来を考えるのに役に立った」「よい経験ができた」などが挙げられており、取材を受けた方々からも、「自分自身を見直す良い機会になった」「若い人たちに自分の思いを伝えられて嬉しかった」など、前向きな感想が多く寄せられている。

【障壁と改善策】参加した学生は、初めてのインタビューや原稿執筆への苦労と共に、取材対象者、カメラマン、編集者などとの時間調整などに苦慮している。はあもにいでは、カメラマン・編集などはアウトソーシングするなどして、学生達の負担軽減に対応している。

## 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

「クマモト・ウーマン冊子化事業」は、学生にとっては就職活動に生かすことができる取り組みでもあり、はあもにいとしても、女性の学び、学び直しができる社会の実現は、女性だけではなく社会全体にとっても必要であると考えている。

それは、取材した多くの女性たちが、結婚や出産、介護・被災などを理由に離職・転居移住した経験を持ち、その過程のなかでの学びや学び直しによって新たなチャレンジやキャリアアップの機会を得て現在の活躍に至っていること、また、「今日の気づきが明日への一歩」という取材で得たメッセージの通り、学びを続けてきたことが大きな力になっていること、さらには、その状況を学生につないだことで、学生にも大学以外での新たな学びと発見、人脈を広げるきっかけづくりが出来たことなどから裏付けられている。

#### 【活動の課題】

- 冊子に取り上げた女性の中に、学生と年齢の近い、これから活躍するだろうという方が比較的少なかった。すでに活躍している女性の紹介とともに、学生にとって、もっと身近なロールモデルを発掘し、紹介する部分があっても良かったかもしれない。
- 本プロジェクトを単年度の一過性のものでなく、形を変えて若年層の社会参画支援、キャリア形成支援事業として継続させていく必要があると考える。

1 女性の活動概要

活動主体	む や ゆかり 撫養 由刈さん (株式会社 office 円山代表)
活動範囲	札幌市中央区
連絡先	wa@mu-ya.jp
活動の概要	古民家を改築し、カフェ“Salon de Muya”を運営。茶道、香道、着付、盆栽などの教室開催や、“日本に生まれたからには一度は茶の湯に触れてみませんか”というコンセプトで行っている茶会(年5回)やその他の企画・主催。 食品商品開発販売、老舗旅館販売スペースのディスプレイ、オリジナル商品納品など、日本の伝統と美をトータルにプロデュースしている。

【プロフィール】

- 2007年以降：ビジネスセミナーなどに参加
- 2009年：(株)office 円山起業
- 2010年：“Salon de Muya”オープン
- 2011年：オリジナル商品「どら抹茶」開発販売  
北のブランドに認定、商標登録
- 2012年：東京、名古屋など各地百貨店で催事出展
- 2014年：シンガポール フード&アジアに出展
- 2015年：自社ブランド「アトリエ GAHOJIN (我達人)」  
を立ち上げ、老舗旅館などに商品納品
- 2016年：銀座ギャラリーにて、帯・着物地による  
和カルトナージュ作家としてデビュー



茶会の参加者たち

2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

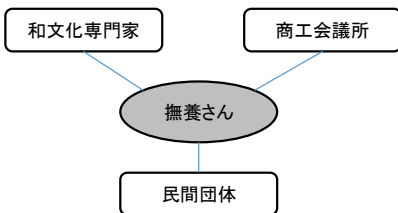
【活動の経緯】

撫養さんは、家業の手伝いと育児、同居していた認知症の養母の介護生活から解放され、自由な時間が持てるようになってから、自分で何ができるか、何かできないかを真剣に考えるようになり、いろいろな本を読んだり、セミナーへの参加を繰り返していた。ビジネス塾、経営学、易经セミナー、ナレッジプラザなど、数え切れない。とにかく何かしなければという思いだった。

当時、京都で大学生活をおくっていた息子と京都の街歩きをし、古き良き文化に触れた。その後息子が海外留学し、外から日本文化を見る機会があり、帰国した時に「日本文化はすごい、大切にしなければならない」と聞かされた。札幌では、なかなか日本の伝統文化に触れたり学んだりする場が少ないことに気づき、これらを若い人達にも身近に感じてもらい、継承していくためにはどのようにすればよいかを考え、築70年の古民家を改築して茶室を造り、和カフェ“Salon de Muya”をオープンした。

和文化教室(茶道、香道、着付け、盆栽、加賀の指ぬきなど)も開催し、和文化を発信する空間を提供している他、親子で茶会を企画、主催している、また、近年はものづくりへの情熱が大きくなり、本格的に作家活動を開始。昔からものづくりが好きで、ジュエリーアートスクールに通い、彫金、ジュエリーをデザインして本格的に製作していた時期もあり、その他、スタンドグラス、トールペイント、パーチメントクラフト、カルトナージュを習い技術を習得した。今年には銀座で仲間と展示会も開催する。

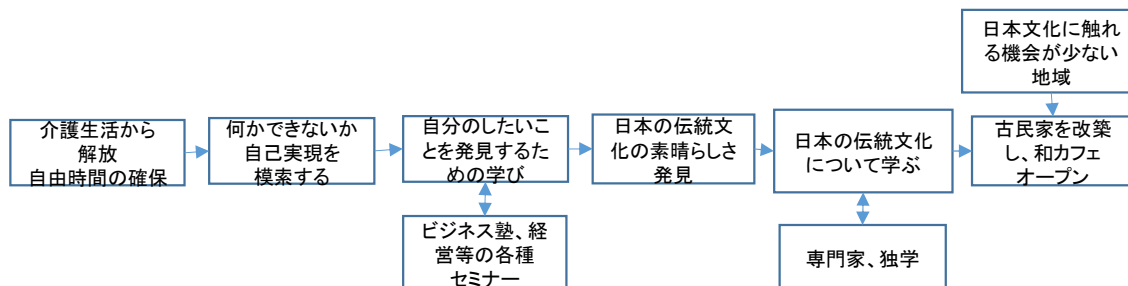
【撫養さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



- 和文化専門家：茶道、香道、着付け、盆栽、加賀の指ぬき等の講師と連携
- 商工会議所：事業化に向けたアドバイス  
ブランド認定
- 民間団体：経営学やビジネススキルについて  
情報提供

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

撫養さんの学びの原点は、行動しなければ何もはじまらないという気持ちから、日本伝統文化を中心として様々な場所や方法で学んでいる。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

撫養さんは日本伝統文化の他に、ビジネス塾、経営学等を学び、現在の“株式会社 office 円山”の代表となっている。活動のための学びについて、実際に自分で起業し活躍している方達のサポートを受けることが参考になると語っている。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】日本伝統文化の素晴らしさを再発見でき、それらを若い人達にも身近に感じてもらうことで、自分自身伝統文化についてさらに深く考えるようになった。

【障壁と改善策】撫養さんはいろいろな経営セミナーなどにも参加していたが、周囲の人からは、主婦が何の目的でこのようなセミナーに参加しているのか、という目で見られた。脳トレーニングのセミナーも受けていたことから、メンタルの面で、こんな無力な自分でもきっと何かできることがあるはずと、自分に言い聞かせながら学んでいたという。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

#### ○自分自身に対して

日々の仕事の中で学びがあり、いろいろなことをやる中で、最近自分が本当にやりたかったことが見えてきた感じがしてうれしいと語っている。

健康でなければ仕事もできないことを実感し、食生活にも気をつけるようになってきている。人のご縁、つながりが大切だと思い、感謝している。

#### ○地域社会に対して

若い人からデイサービスの利用者達まで、カフェの雰囲気や、各教室に参加することで、日本文化の古き良きものを理解し楽しむ人達が徐々に増えている。いろいろなイベントがあるので、しまってた着物を着る機会が持ててうれしいと喜ばれている。

#### 【活動の課題】

- 事業を進めるに当たって、資金調達に関する情報が不足し、いろいろと苦労した。
- 商工会議所からの支援により、低金利で資金を確保できたが、女性に限らず、ビジネス展開するに当たっては、より実践的な経営学の学びや、資金調達等の方法について情報を受けられる環境づくりが必要と語っている。

1 女性の活動概要

活動主体	木村 里美さん（大槌商工会女性部長、大槌町教育委員会学校支援コーディネーター）
活動範囲	岩手県大槌町
連絡先	otsuchi@shokokai.com
活動の概要	大槌町教育委員会学校支援本部の学校支援コーディネーターとして、大震災からの復興を地域・学校とともに目指して活動をしている。学校行事・それぞれの授業等に合った、子ども、地域、学校の橋渡しをすること活動を主に行っている。今まで一緒に活動したメンバーは多数。 大槌商工会員（50社以上）は、中学生の職場体験受け入れ、大槌商工会女性部員（部員56名）からは、約10名、また、地域住民は約50名がふるさと科の講師・補助を行っている。

【プロフィール】

1964年：大槌に生まれる  
短大卒（幼稚園教諭・保育士資格）  
1986年：釜石市役所入庁、釜石市立上中島保育所にて勤務  
1991年：結婚を機に退職  
2005年：母親から自営業（印刷業）を引き継ぐ  
大槌町観光協会理事  
2011年：震災後、町で唯一の本屋を夫婦で立上げ  
2013年：学校支援コーディネーター  
2014年：大槌町商工会女性部長  
大槌町社会福祉協議会評議員



七宝まり（商工会女性部製作）

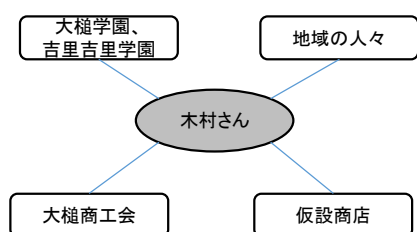
2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

【活動の経緯】

木村さんは、地元で生活し事業を営んでいく中で、大槌町商工会女性部の一員として、地元の住民として、また、子育てをしている親として、地域の様々な活動に参加してきた。地域で暮らす人たちがお互いに協力し、助け合っていく必要性と重要性を感じ、地域への関わりを深くしていた。

2011年の大震災を契機として、自宅も全て失い、変わり果てた故郷で必死に毎日を過ごす中で、皆が支え合い、知恵を出し合って生活していかなければ、という思いを強くしていた。同じタイミングで大槌町教育委員会から学校支援地域本部のコーディネーターを拝命し、新たに生まれた「ふるさと科」の協力を中心に活動。ふるさと科は、地元の人達が地元子どもたちに、学校の授業の中でふる里の文化や伝統、産業を伝える活動を授業として行っているが、子どもたちだけではなく、地域の方々も一緒に元気になり、生きがいや自信につながっている。「町で育て、町がともに育つ」大槌町の新しい教育スタイルに共感し、3年間の活動で日々実感しながら、学校と地域をつなぐコーディネートを行ってきた。そこでは、子どもたちと地域の人達が触れ合い、温かな笑顔がうまれるだけでなく、震災により難しくなったコミュニティが、子どもを中心に一歩ずつ確実に生まれている場面を見ることができた。家族からの理解と職場のスタッフがサポートしてくれたことが、木村さんが仲間達との学びや活動に 取り組む後押しとなっている。

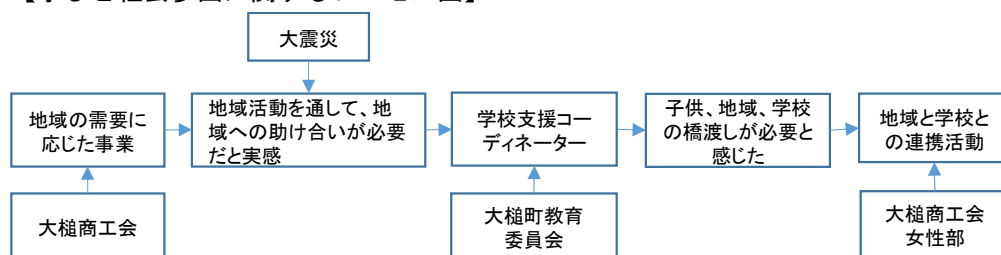
【木村さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



大槌学園、吉里吉里学園：学校支援  
地域の人々：大槌町や自営業（印刷業・本屋）を通して関わる地域の方々  
大槌商工会：商工会女性部・青年部  
仮設商店：大槌町福幸きらり商店街

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

東日本大震災大津波後、環境が大きく変わり、自分自身を含めて町民の大部分が仮設住宅での生活を余儀なくされた。昔からの小さな地域ごとのつながりが一瞬に崩れ、人づてに安否の確認をすることが精一杯だった現実。全てがゼロからの始まりだった。

商工会女性部の活動も、部員の安否確認からスタート。多くの部員の命だけではなく家族も亡くした部員もたくさんいた。町内をめぐり、避難所をまわり、当時の部長、事務局が必死でつないでくれた絆を守らなければ、と部員の誰もが思った。震災から5年。お互いの心をいたわりあいながら部員同士で声を掛け合い、今できることを静かに無理なく活動を進めてきた。

震災の影響で町民同士の交流も難しくなり、学校行事や授業においても地域と学校との橋渡しの存在が必要になり、教育委員会から協力の依頼を受けた。大槌町では前例が無かったため、初めに大槌町教育委員会の研修を横浜のコミュニティスクールで受けた後、手探り状態で地域と学校との連携活動をスタートした。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

経営者として、地域需要に応じた事業を続けていくために、大槌商工会や、全国又は県組織の商工会連合会の講習会に参加した。

学校支援コーディネーターとして、県内外の市町村の同じ立場の方々との交流会に参加し、他市町村との違いや共通点、それぞれの地域の課題などの意見交流をした。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】年齢や地域を越えた人と人がつながり、助け合い、笑顔が生まれた。自分と違う立場の方を理解し敬い、いたわる場面がたくさんみられた。

【障壁と改善策】一日の時間を調整する事が一番大変である。女性が集中して学ぶには、職場の経営者の理解やスタッフ同士の助け合いが必要となる。

## 4 活動の成果と課題

### 【活動の成果】

#### ○自分自身に対して

地域でのいろいろな活動に参加するたび、故郷の四季を以前よりもはっきりと感じられるようになった。

#### ○地域社会に対して

「ふるさと科」の授業は震災後に誕生し、地域の方々だけでなく、町外の教育機関からも注目されている。活動がきっかけで、学校と地域のつながりがより深くなり、地域の方々が子供たちや学校に関心を持つようになったことが挙げられる。また、同じ目標を持って一緒に取り組むことで、地域住民のコミュニティがさらに深まってきたという声をよく聞く。

### 【活動の課題】

- 活動を進める上で、若い年代（特に勤め人）に協力をお願いする難しさを感じている。
- 誰もが活動に参加できるよう、年齢層を豊かにし、参加者に配慮した無理のない声掛けをしたい。
- ふるさと科の授業については、それぞれのニーズにあった地域の方を掘り起こし、子供の興味をひきつける工夫と知恵を出し合い、子供たちだけでなく地域の方々も新たな発見や気づきが増え、共に学びあい成長できる関係を築くことが必要。
- 復興の途中の大槌町は、これから地域環境が日々変わっていくので、今の時点では「活動を継続すること」が大きな目標。

1 女性の活動概要

活動主体	おぎの としえ 荻野 利江さん等6名（食遊三和）
活動範囲	茨城県古河市（旧三和町）東山田
連絡先	syokuyusanwa@yahoo.co.jp
活動の概要	食遊三和は古河市による女性企業ネットワークのメンバー6人による地産地消の取組である。畜産、茶、施設野菜（ハーブ）、露地野菜などそれぞれが違う分野の農業生産を営んでおり、個々が自分の得意とする農産加工で起業している。代表的役割を担当する荻野さんは、味噌づくり、手打ちそば体験など食育に取り組んでいる。メンバーは6人である。

【プロフィール】

- 1998年：パートナーシップ推進協議会に参加
- 2004年：食遊三和を結成
- 2005年：県民まつり出品参加（他県内イベント年6回出品参加）
- 2007年：地産地消人材コーディネーター育成講習会参加
- 2008年：いばらき農業元気アップ女性リーダー育成事業参加
- 2009年：起業養成講座参加
- 2010年：いばらき元気アップ大賞受賞
- 2011年：古河ブランド認証取得



メンバー

2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

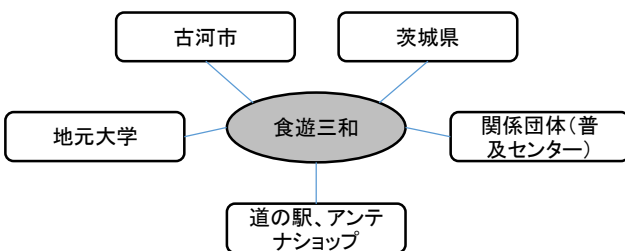
【活動の経緯】

荻野さん達6名は、それぞれ地域で農業活動を行いながら、農産加工品づくりに興味を抱いていた。1998年に実施された古河市（旧三和町）の“パートナーシップ推進協議会”に参加し、そこで農産加工に興味がある仲間達が知り合い、「古河市女性起業ネットワーク」を結成することになる。

“ネットワーク”、“フットワーク”、“チームワーク”の3つの和力を大切にしており、共通する目的は何か、異なる活動をどのように活かすか、どうしたら魅力ある加工商品を作れるか、どのように魅力を持たせどのように販売していくかなど、互いに話し合いながらそれぞれが得意とする農産加工品を中心に商品づくりに取り組んだ。食材は自家製にこだわり、添加物の無い健康食品にこだわっている。行政による協議会への参加が活動推進の直接のきっかけであるが、それまでも個人個人が農産加工に関する情報を収集し、失敗と新たな工夫を繰り返しながら加工商品づくりを進めてきており、そうした取組が、現在の活動を後押しするモチベーションとなっている。

荻野さんは酪農家に嫁いでから家族や関係団体等の指導を受けながら酪農の勉強や農業活動に取り組んできた。日々苦労しながら学びの連続だったという。他のメンバーも同様に、自分のやりたいことを商品作りに活かそうと新たに起業し、情報を収集し、試行錯誤を繰り返しながら現在の農産加工品づくりに至っている。地元行政はこうした活動に積極的であり、食遊三和の商標登録やセット販売商品を「古河市ブランド」に認定したりするなど応援している。

【荻野さん達を取り巻く人的ネットワーク、つながり】



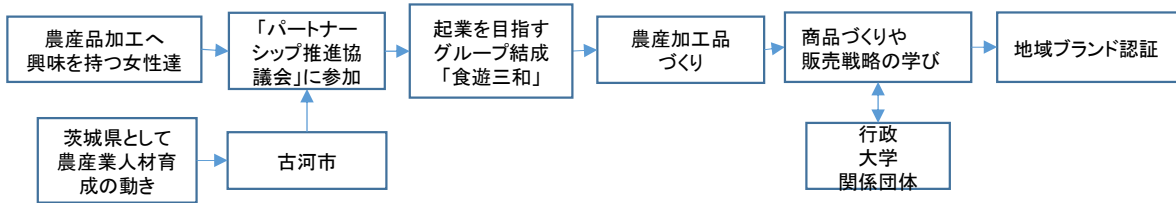
- 茨城県：農産加工品づくりの情報提供、指導
- 古河市：ブランド認証、IT機器等の指導
- 地元大学：農産加工品づくりの情報提供、指導
- 普及センター：県の出先機関、情報交換、地産地消のイベント連携
- 道の駅、アンテナショップ：商品の販売、マーケティングの実習の場

\*食遊三和メンバー：

- 荻野利江さん、小山玲子さん、八城しずひさん、鈴木雅子さん、上野さとさん、船橋智子さん

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

荻野さん達6人のメンバーは、農産加工に興味を持ちそれぞれが工夫しながら生産販売に取り組んでいたが、行政の協議会参加をとおして仲間となり、メンバー相互が情報交換しあい、県、市からの情報提供、指導等も受けながら、より魅力ある加工品づくりに取り組んでいる。これまでの活動が全て順風満帆だったというわけではない。初めて県民まつりに出品したときは、多くの商品が売れ残ってしまい、帰りの車中でどうして売れないのか、お客がなぜ立ち寄ってくれないのか反省会を開き、売するための仕組み作りを話し合った。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

メンバーは、茨城県や地元大学の指導研究機関、古河市農政課から情報提供を受けたり、販売に向けたIT機器の指導を受けたりしながら、魅了ある商品づくりを進めており、一方で、グリーンツーリズム専門家養成講座や女性起業高度化セミナー、地産地消人材コーディネーター育成事業などにも参加し学びを続けている。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】メンバーとの話し合いの中で加工商品づくりのアイデアが生まれたり、行政や農業専門家との交流の中で販売方法や地産地消への取組など専門的知識を習得でき、気づかされることが多い。

【障壁と改善策】子育てへの負担が多少あったが、メンバー同士で協力しあい、家族や行政からの協力を得ながらメンバー同士の話し合いや商品づくりをしてきた。大きな障壁はないと語っている。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

##### ○自分自身に対して

学ぶ仲間同士の居場所が確保でき、情報交換や話し合いなどをとおして、農産加工品づくりへの刺激を受けている。

##### ○地域社会に対して

地域ブランドができたことで、地元食材への関心が地域で高まっている。食遊三和の活動をとおして農業に携わる人達に元気を与えているのを感じている。

#### 【活動の課題】

○現在、メンバーは家族の協力を得ながら活動をしているが、メンバー同士の話題の中心は次世代育成である。

○次世代に引き継ぐためにも、魅力ある農産加工商品をつくり、地域ブランドの維持強化を目指していくことが必要と日々情報収集し、メンバー同士刺激し合っている。

## 1 女性の活動概要

活動主体	吉岡 マコさん (マドレボニータ代表)
活動範囲	東京都杉並区
連絡先	info@madrebonita.com
活動の概要	マドレボニータは、「美しい母がふえれば、世界はもっと良くなる」をキャッチフレーズとして、女性の産後のケア、子育ての導入期の女性の心と体の健康をサポートしている。活動は個人で1998年からスタート、2008年にはNPO法人を設立。現在は全国60ヶ所以上で「産後のボディケア&フィットネス教室」を開催している。マドレ基金を立ち上げ、ひとり親や障がいをもつ子の母などの支援を行うとともに、「産後白書」を発行するなど、女性の産後ケアの重要性を啓発している。

## 【プロフィール】

- 1998年：出産、産後のボディケア&フィットネス教室開設
- 1999年：教室を一時閉鎖し、出版社就職  
出版社を6か月で退社し、フィットネスクラブでアルバイト（2002年まで）
- 2002年：「インストラクター養成コース」開始
- 2008年：NPO法人マドレボニータ設立
- 2010年：第1回NECワーキングマザーサミット開催
- 2011年：マドレ基金を設立
- 2014年：「第14回テレワーク推進賞」奨励賞受賞  
「第2回日経ソーシャルイニシアチブ大賞」国内部門賞受賞



ケア活動の状況

## 2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

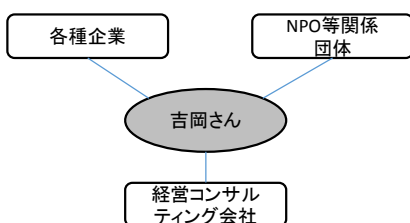
## 【活動の経緯】

大学院時代の留学後に出産した。出産後の身体の変化と、産後の育児が予想外に大変だったこと、世界的にも評価されている日本の母子保健の制度に「産後」という分野が欠けていることに気付いたことも大きなきっかけである。

きっかけを遡ると高校時代に世界的ネットワーク団体(AFS 日本協会)を通して留学したことにある。背景の違うものを受け入れて洞察する、価値観を決めつけない、物事をジャッジしない事などを留学前から徹底的にトレーニングされ、1年間の留学で身を以て体験した。価値観の判断留保をするトレーニングは今の活動に活かされている。

マドレボニータは固定のオフィスを持っていない。教室は貸しスタジオであり、団体が養成・認定したインストラクターが個人事業主としてレッスンをおこなう。受付のやりとりはインターネットで行う。都内在住スタッフは4人、兵庫県、奈良県、長野県在住のスタッフが自宅やシェアオフィスなどでバックオフィスの仕事を担う。事務局長はアメリカ在住である。マドレボニータは、こうしたクラウドオフィスの運営方法を採用することで、女性の雇用継続、雇用創出を生み出している。人の力を生かす場を提供しながら、全ての人にとって産後ケアが当たり前の世界になることを目指しており、個人や企業から寄付を募って「マドレ基金」を立ち上げ、社会的に孤立しがちな母親を対象に支援している。また、「産後白書」の発行など、社会への啓発・普及や調査研究にも取り組んでいる。

## 【吉岡さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



企業：「日経ソーシャルイニシアチブ大賞」を受賞したことで、支援するに値する信頼できる団体という対象として選ばれ、複数の企業から支援と寄付を受けている。

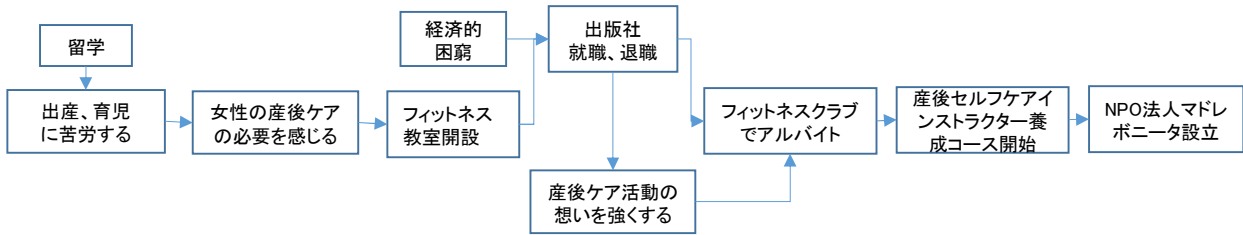
NPO等関係団体：NPO法人

経営コンサルティング会社：経営の指導



### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

スタッフの一人一人が市民発の産後の専門家であり、運動家でもあり、日々勉強会を重ねている、活動を知ってもらうために、企業や行政に企画提案したりプレゼンも行っている。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

活動を進める中でリーダーシップがないことに気づき悩んでいたが、“真のリーダーは変革と創造に挑戦する人だ”という言葉に後押しされた。どのようなリーダーも現場で様々な悩みを抱えているがあきらめずに奮闘している。健康的に組織で力を発揮する環境を創るには、高度な技術が必要となる。いかに問題の構造を見極め、それを共有し対話できるか。ノンバイオレント・コミュニケーションやシステム思考などにヒントがあるのではないかと考えている。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】リーダーシップについて悩んでいたが、NPOのリーダーたちとの交流や、リーダー育成機関のプログラムに参加することをとおして、どのようなリーダーも現場で様々な悩みを抱えながら頑張っていること、始める前は誰も知らないけれど、始まったら当たり前になる。まさに自分が産後ケアの分野で実行しているのではないかと気づかされ、前に進むエネルギーをもらった。

【障壁と改善策】活動の規模が大きくなるにつれて、マドレボニータが目指すものは何か、マドレクオリティは何か問われる場が多くなった。これだけは譲れない質というものは、スタッフの中で暗黙のうちに共有されていたが明文化はされていなかったものが多い。そこで、それらを明文化するために、スタッフやインストラクターが集まり、一人一人がコミットする勉強会を何度も持った。これによってマドレボニータの理念、ミッション、ビジョンを再構成し、明文化することができている。しかしその作業にはゴールはない。それらは、団体の成長とともに、変化していき、アップデートされていくべきものだからだ。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

##### ○自分自身に対して

子供を抱えて、就職することもままならなかった状況から、自分の能力を活かす仕事や機会を得て、誇りと尊厳をもって生きることができるようになった。

##### ○地域社会に対して

草の根で活動していく中で成果も出てきており、企業からの支援も受けられるようになってきた。一方、資源はお金だけではない。団体の理念や活動に共感し、協力してくれるボランティアの力や、物品寄付なども貴重な資源と捉えている。現在、マドレボニータには年間300人のボランティアが参加している。

#### 【活動の課題】

- 産後女性を社会全体でサポートするような仕組みが、社会基盤として整備されるべきと考えている。
- 産後女性の心身を整えるというニーズだけでなく、パートナーや職場の理解など、外部環境が整う必要がある。
- 産後ケアなんて贅沢だといった偏見や思い込みを、払拭するための気運づくり。

1 女性の活動概要

活動主体	なかむら よしえ 中村 好江さん（シニア・ハマ・カレッジ 代表、及び L&C プランニング・スタジオ 主宰）
活動範囲	横浜市を拠点として市域全体
連絡先	
活動の概要	「シニア・ハマ・カレッジ」は、高齢者のくらしの課題を解消し合い、誰もが安心して暮らせる地域づくりを進める市民活動団体であり、高齢期の生涯活躍人材育成支援、高齢者の生活情報支援学習機会の提供活動を行っている。メンバーは8名。 「L&Cプランニング・スタジオ」は民間企業、社会福祉法人等における能力開発研修、教育委員会主催講座講師、大学公開講座講師、人材育成コンサルティング等の個人事業者。

【プロフィール】

1979年：民間企業退職。出産・子育て専業主婦  
 1989年：横浜女性フォーラムの講座受講活用開始  
 1993年：区生涯学級企画運営ボランティア開始  
 1996年：かながわ生涯学習ネットワーク推進協議会専門部会委員等各種行政事業に参画  
 1999年：「L&Cプランニング・スタジオ」開業  
 2004年～2012年：八洲学園大学生涯学習学部人間開発教育課程における研究在学  
 2010年：社会教育活動団体「シニア・ハマ・カレッジ」創出。現在までに36種の公開事業開催  
 2012年～：横浜市福祉保健研修交流センター「ウイリング横浜」の研究活動団体となり、毎年時、実践研究論文を発表



研修活動の状況

2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

【活動の経緯】

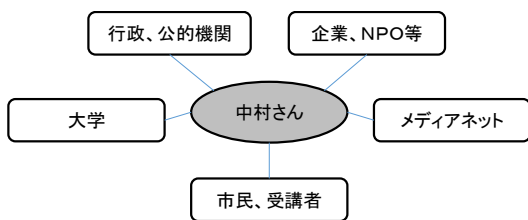
中村さんは、民間企業の総務・労務・人事・役員室担当にて15年間勤務した後、子育て専業主婦・市民生活者となり「生きること・学ぶこと」に目覚めた。その後の人生は3つのステップで生きてきた。

●学びとボランティア（学級運営）活動時代：子供の小学校入学と同年にオープンした「横浜女性フォーラム」は、専業主婦の女性たちの経済的・人間的自立を支援し、時代の先端の学習ができる施設で、多種多様な講座の受講と職員との交流を重ねた。約5年の間に「大人が学ぶ意味と生きること」を、身をもって理解した。区行政からの募集があり生涯学級企画運営に携わった。

●起業して事業者：傍ら大学での専門研究在学：平成11年、能力開発研修を主とする事業を起業。各地行政・教育委員会主催講座講師。平成16年八洲学園大学生涯学習学部人間開発教育課程に入学。独自の高齢社会支援社会教育の開発手法に取り組み、特別研究生として8年在学。研修事業にも活用。

●シニア・ハマ・カレッジ設立以降：研究の中から「シニア・ハマ・カレッジ」を実際に市民団体として創出。未曾有の超高齢社会の高齢者当事者として、長い高齢期の支援をする「社会教育活動」を実践、現在に至る。学びと活動（仕事）の実践化は、企業で培った実務力・マネジメント能力、経験が土台となっている。

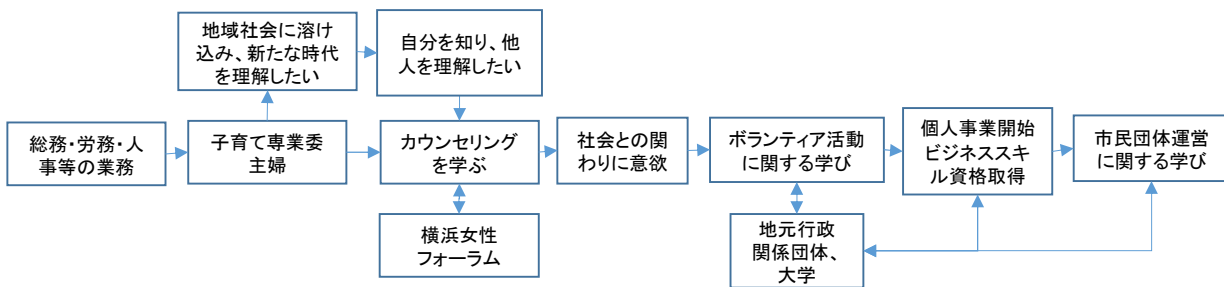
【中村さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



行政、公的機関：企画採用支援・助成金取得・登録ボランティアの活用  
 企業、NPO等：CSR協力・講師協力  
 大学：講師招聘・講師出番  
 メディアネット：執筆、告知掲載、ネット情報掲載  
 市民、受講者：市民の学習や活動機会を支援する対象者

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

中村さんは、子育て専業主婦から次へのステップ・生き方も想像しつつ学んでいた。「学習支援」という活動に目覚め、基礎知識を習得（資格取得）し学級運営を実践。実践経験を積み、更に職業化を目指してビジネス界の各種研修を受け、専門資格も取得し起業に至った。教育・指導の事業者は常に自分自身の能力開発も必要であり、大学に社会人入学し仕事力アップも目的とする研究在学をした。オリジナル研究開発の成果として「シニア・ハマ・カレッジ」活動団体創出に至った。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

中村さんの3つの人生ステップをつなぐ学びは多岐にわたっている。

##### 【ボランティア活動に必要な基礎知識とスキルの取得のための学び】

・女性の自立を目指す各種講座受講。社会通信教育「生涯学習指導者養成講座」「カウンセラー養成講座」。

##### 【ビジネス研修力、認定資格取得、ブラッシュアップ等のための学び】

・複数の大学や研修会社等での、現代的課題、心理学や経営学（大学院レベル）の学び、コーチング認定資格取得、能力開発研修用プログラムの受講、社会教育主事任用資格取得。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】横浜女性フォーラム（現男女共同参画センター横浜）での5年間は、自己理解や多様な人々の存在を知る目覚めとなった。その後の人生の拓き方は「学びと実践」の繰り返しであり、現在までの道を拓くことにつながった。学びは成長の楽しみであり、可能な時間・費用の範囲としてきた。初期の学習費、活動費用は「趣味への出費の代わり」と考え、職業力アップのための研修受講費は必要経費である。こうしたマネジメントも重要な自己管理能力と考えている。

### 4 活動の成果と課題

#### ○自分自身に対して

活動をとおして市民活動や時代の動き、政策、知識の補充をすることができており、新たな好奇心と、知識・スキル等の進化につながっている。

#### ○地域社会に対して

「シニア・ハマ・カレッジ」の活動は、地域でも知られる存在となっており、地域社会に対する高齢者支援、生涯現役モデルの啓発につながり、受講生からの運営委員参画においては人材育成にもつながっている。

#### 【活動の課題】

- 「シニア・ハマ・カレッジ」の拠点確保や活動資金確保は基本的に地域活動の課題である。設立から初年度の事業展開は、男女共同参画センター横浜、戸塚地区センターの施設を利用してきた。
- 現在は、横浜市社会福祉協議会運営の福祉保健研修交流センターの「研究活動団体」となり、毎年審査を受け「研究室(会議室)」の提供を受けていて恵まれているが、「シニア・ハマ・カレッジ」の事務局は、中村さんの個人オフィスに依存している。

1 女性の活動概要

活動主体	須田 貴子さん（心をつなぐ居場所づくり応援団よろんごの木副代表）
活動範囲	新潟県柏崎市
連絡先	
活動の概要	<p>よろんごの木は、地域内外の子供からお年寄りまで集える居場所づくりと、支え合いの体制づくりを目指している。スタッフは約15名。</p> <p>主な活動内容は、子育て支援、高齢者支援、暮らしの助け合い、傾聴・啓蒙活動、中高年の居場所づくり、まちづくり事業などの他、地域包括ケア中会議への協力、生活支援サービス研究協議体への参画等。</p>

【プロフィール】

- 1993年：学校のPTA会長などを歴任するようになり学校や地域とのパイプ役の大切さを学ぶ。
- 2000年：市健康推進員として健康福祉分野に参画。
- 2002年：柏崎市子ども会連合会理事や比角地区子ども育成会理事として子供の育成活動に参画
- 2007年：中越沖地震の避難所運営に関わったことから、県内外のボランティアとのネットワークを学ぶ
- 2009年：文科省から委託された家庭教育支援員として相談業務に携わる
- 2011年：子供から高齢者までが集える居場所「よろんごの木」を比角地区に設立
- 2014年：新潟県子ども会連絡協議会会長、柏崎市青少年健全育成市民会議会長としてとして安全教育を推進している。



子供への防災教育

2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

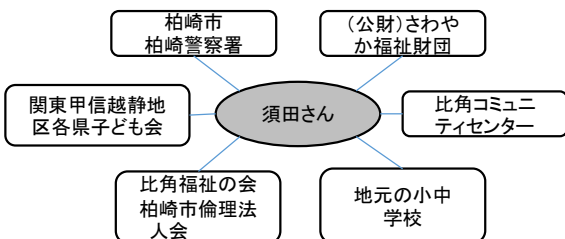
【活動の経緯】

須田さんは、子供が幼稚園、小学校、中学校、高校と進学する中で積極的に学校や地域に関わっていき、役員としての活動も積極的に行ってきた。そうした活動の中で、人の前に立って話をしたり、他の団体と連携することも多く、話をしたり情報交流するにはもっと知識を持つ必要があると思い、NPOや行政から情報提供された研修会に積極的に参加し、また、独学で学んだ。

子供に関わる様々な事業展開をしている中、平成19年7月中越沖地震が発災。震災後の心のケア活動をしていく後、支えるのは子供だけではなく、地域の枠を超えた包括的に支える仕組みづくりが必要ではないかと感じた。学ぶ内容は、子育て支援、家庭教育支援、高齢者支援、まちづくり、男女共同参画等となり、学びの期間は子供を育てた30年間と役員活動をしていた期間のほとんどである。

現在、「地域で学んだ和と輪」でつなぐまちづくりを初め、地域のボランティア育成や地域行事等を実施しながら、地域住民の多様なニーズにきめ細かく応えるサービスを考えている。

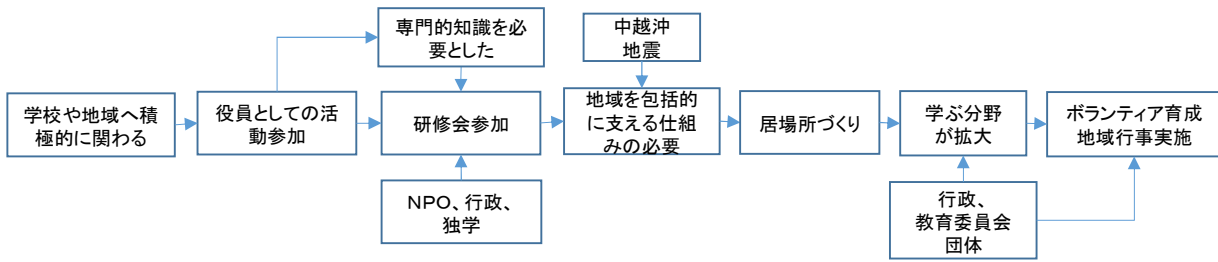
【須田さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



- 柏崎市（教育委員会、社会福祉協議会、柏崎警察署）：支援活動に関する情報交換
- (公財) さわやか福祉財団：インストラクターとして国の情報提供
- 関東甲信越静地区各県子ども会：他県の情報提供
- 比角コミュニティセンター：子供たちの居場所
- 比角福祉の会：高齢者との仲介
- 柏崎市倫理法人会：事業を実施の協力
- 地元小中学校：活動の連携

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

須田さんは、学校や地域の活動に関わる中で多種多様な役割をまかされるようになり、その都度、皆が満足するにはどうしたらよいかを考え、専門的な知識を身につけようと学んできた。価値観が多様化する中、心のゆとりを持つことのできる空間である「居場所」をつくることで、より多くの方々の「つながり」や会話が生まれ、また、居場所づくりを進める中で、ここに集まる子供やお年寄りが求めているものは何か、満足感を与えるためには何をしたらよいか、どのようなサービスが必要かを考えながら、情報を集め、仲間と話し合い、専門家の話を聞きながら学びそして活動している。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

子どもやひとり親家庭、高齢者を支えるために何が必要かを仲間たちと話し合った。行政側の支援策にも限界があり、民間だからこそできる隙間を補う支援策を考え、そのための学びを行った。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】多種多様な人々との交流をとおして、専門的な知識を身につけることができ、また人脈が出来た。

【障壁】時間の確保が困難であったが、毎日、家族で日程について話し合い協力しあうことができた。また、全てを自分自身で行うのではなく信頼できるスタッフと役割分担することを学んでいる。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

##### ○自分自身に対して

学校や子供の保護者からの相談（現状）や、高齢者の要生活支援状況が理解できるようになった。

##### ○地域社会に対して

地域社会への効果として、13年間の活動をとおして、少なからず、子育てしやすい地域になっていると感じている。また、柏崎市を会場として開催した、さわやか福祉財団主催の講演会事務局として参画することで、団体への理解や高齢者の生活支援サービスに関する意識向上を図ることができた。

#### 【活動の課題】

○女性が集中して学び、活動するには、子供や家族・会社から理解してもらい、いかに自分自身の時間を持つことができるかが重要となり、特に子育て中は信頼できる人や信用できる保育サービスを受けられる場所が必要となる。

○女性だけでなく、高齢者や退職された方々が、自然に子どもたちを見守れる、もしくは関わることのできる安全で安心な循環型の社会環境を創ることが必要であり、須田さん自身もそうした活動に関わっていきたくないと願っている。

1 女性の活動概要

活動主体	おだぎ ともこ 小田木 朝子さん ( ON-MO プロジェクト代表)
活動範囲	静岡県浜松市
連絡先	odagi@nokioo.jp
活動の概要	ON-MO プロジェクトは、小田木さんが所蔵する IT 企業の一事業である。子育て中のママが社会と繋がり勉強することを「育勉 (いくべん)」と名付け、定期的にセミナーや交流会を行い、再就職や、子育てと仕事の両立を支援するプロジェクトである。 <a href="http://on-mo.jp/">http://on-mo.jp/</a>

【プロフィール】

- 2002 年：アパレル通販企業に入社
- 2005 年：IT 企業へ転職
- 2010 年：中小企業診断士 資格取得
- 2011 年：現在所属する株式会社 NOKIOO に創業メンバーとして参画
- 2013 年：「いつか働きたいママへ育勉のすすめ&ママ交流会」開催  
ON-MO プロジェクトの立ち上げ
- 2015 年：中小企業庁「平成 26 年度補正予算地域中小企業・小規模事業者人材確保等支援事業」により静岡県で主婦の再就職支援事業を受託



プロジェクト参加メンバー

2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

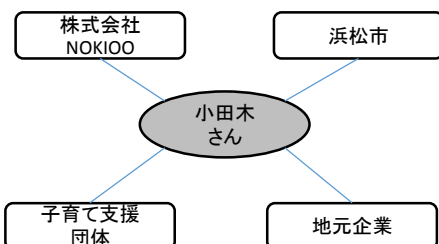
【活動の経緯】

小田木さんは、大学卒業後、浜松にある会社に就職、3年半勤めた後 IT 企業に転職、その間長女を出産し育児がスタートする。日々、ママになった喜びや感動が大きかったが、慣れない育児へのとまどい、仕事から一転した生活のペースもつかめず、自信喪失状態になる。育児という大切な時に、母親として上手くいかない自分への自己嫌悪や罪悪感も出てきた。特に出産直後は、日中は誰とも話さない孤独感、何も生産していない自分への焦り、社会において行かれているような気分になった。子育て以外の時間を持ちたい、毎日の生活を充実させたい、ブランクを抱えたくない、自分に何か価値を持たせたいという気持ちでいっぱいだった。そんな気分を晴らしたのが“育勉 (育児しながら勉強するという造語)”だった。まず早朝の 1, 2 時間を利用して資格取得の勉強を始めた。それが、気分転換になり、かつ自分の時間が持てる充実感や達成感の心地よさにはまり込んだ。

育勉の結果、子育て中でも資格が取得できたという自信や、子育て中も時間管理を工夫して自分の時間を生み出すテクニック、ポジティブな考え方は、復帰後の仕事を大いに支えてくれた。

こうした子育て中の自信喪失とそれを乗り越えた経験から、同じような悩みを持つママを支援する仕組みを作りたいと奮起し、所属する IT 企業 (NOKIOO) での事業として ON-MO プロジェクトを発足した。特に力を入れるのは再就職支援であり、行政の支援が届いていない潜在的求職者 (就職活動はしていないが「いつか働きたい」と考える者。ママ/若年主婦の中では 4 割程度に達する) を対象に勉強会やイベントを開催している。

【小田木さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



株式会社NOKIOO:小田木さんが所属する IT 企業で、活動を支援

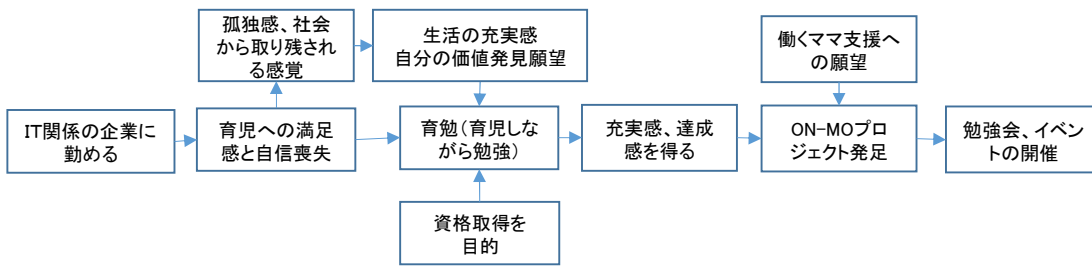
浜松市: 子育てママが学ぶため資格取得、起業のための情報提供、セミナー等の開催拠点情報提供

子育て支援団体: 子育てママが抱える問題課題、ニーズ等について情報交流

地元企業: 女性の社会復帰に向けて情報交流

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

小田木さんが取り組んだ育勉は、本人のスキルアップにも、子育てにも効果があった。取り組み後は、すっきりとした気分と笑顔で子供に向き合え、毎日続けることで、育児中に母親が抱えがちな理由なき不安をシャットアウトできる。さらに資格取得にもつながれば大きな成果が得られる。こうした経験が、働きたいと考えるママを支援しようという現在の活動につながっている。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

育勉をとおして学んだ内容は、中小企業診断士、1級販売士である。育児のすきま時間を活用し、自宅で独学で学んだ。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】学ぶことを通して、子育て中の自分に自信が持てた、働くことについて不安が軽減された、学ぶ楽しさや大切さに気づくことが出来た、自分の人生観や子育て観が広がったなどを挙げている。また、夫へ笑顔を向けることができています。

【障壁と改善策】時間が無いことや子育てで忙しい等などがあるが、置かれた状況の中で工夫して時間を作るという発想があると、その人にあった学びができると感じている。子供が授乳中であった時も、自宅で早朝やお昼寝時間を使って学べる独学はびったりだったという。

女性が集中して学ぶことができるためには、「これを学びたい」という目的を、まず発見できる機会が必要だと考える。「やりたいことが見つからない」「何をすればいいのかわからない」という母親は実に多く、「目的」を発見できる人は少数。きっかけづくりが必要であり、託児付セミナーなど母親の参加を想定した学びの機会があると、潜在的な学び希望者を引き上げることにつながると考えている。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

##### ○自分自身に対して

自分自身が取り組んできた育勉が、女性が生涯をとおして仕事を続けられ、人材として価値を持つ子育てママブランド形成につながっている喜びを感じている。

##### ○地域社会に対して

育勉セミナーは7人の参加者でスタートし、現在は年間100名が受講する活動になっている。高い学歴や語学力、専門技術、独身時は仕事に熱中した経験を持ちながら、育児期にくすぶっているママが多いことに驚かされている。

子育ては決して空白ではないというメッセージ発信と育勉の提唱、働きたいと考えるママ同士のネットワークが構築され、少しずつ活動が認知されている。

#### 【活動の課題】

○ 子育て経験のある女性の能力は、潜在的 가능성이非常に高いと感じており、これを活用することが必要。

○ 「やりたいことが見つからない」「何をすればいいのかわからない」というママは実に多く、目的を発見できるママは少数である。

○ 学びの環境を整えることと合わせ、きっかけづくりを提供することで広がるのではないかと。学びの対象に出会える場や、タイムマネジメントなどの学び方を教える場などが託児付きであると、潜在的な学び希望者を引き上げることにつながる。今後は NOKIO 関連の企業とのマッチングを目指している。

1 女性の活動概要

活動主体	にしむら もとみ 西村 元美さん（イソモン・シックス元代表、戸畔の会代表）
活動範囲	三重県大紀町
連絡先	
活動の概要	ISOMON6（イソモンシックス）は、地元で元気とやる気を起こそうと、6人のお母さんが立ち上がり、海開きイベントや失われつつある祭り行事の継承・保護を進める活動をしており、現在、町内の他グループと、「丹敷戸畔（にしきとべ）の謎解明プロジェクト」に取り組んでいる。「戸畔の会」代表でもある。

【プロフィール】

- 2009年：海開きイベント「いそもんフェスタ」を仲間と共に立ち上げる
- 2010年：行事、伝承などを調べる
- 2011年：地元に残る言い伝え、行事などを1枚紙芝居制作
- 2012年：「丹敷戸畔（にしきとべ）の謎解明プロジェクト」スタート
- 2013年：「都に続く錦の道を歩く」スタート
- 2014年：「都に続く錦の道を歩く」パート2実施
- 2015年：同パート3実施



戸畔の会の活動状況

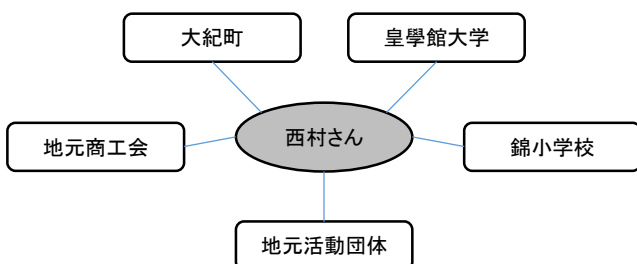
2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

【活動の経緯】

「古事記」「日本書紀」のクライマックスのひとつが、初代天皇の即位を描いた「神武天皇東征」のくだりである。海上から大和を目指した神武天皇の軍勢は、さまざまな苦難を乗り越えながらやがて熊野の地に上陸し、大和を攻め落とす。はたしてその上陸の地が、現在のどこなのか。大きな謎に包まれているが、大紀町錦地区はその有力な上陸地とされ、錦と奈良を結ぶ道が存在していたとされている。錦という小さな港町から、貴重な考古資料が集中的に出土し、奈良との間に交易があったことを示す「平城京跡出土木簡（荷札）」も見つかっている（「美し国おこし・三重」情報誌あむあむより）。

西村さんは、ISOMON6の仲間たちと、よさこいソーランで子ども達を踊らせてあげたいと、発表場所確保のために、「海開きイベント」の運営や地元祭りの開催など、地元で元気とやる気を起こす活動をする中で、錦の言い伝えや行事などが消えかけていることに気づき、こうした歴史のある土地や道を後世へ伝えていきたいと活動を始めた。地元で地域振興に取り組んでいた団体に声をかけ、「丹敷戸畔の謎」解明プロジェクトを立ち上げ、地元の歴史や伝承から食に至るまで幅広い調査を行ってきた。皇學館大学の専門家からの情報提供や指導等を受けながら、錦から奈良の都へと続く道を、「魚（いよ）の道」と名付ける。現在、地元の歴史を学びながら、ガイドマップ作成に着手し、周辺の史跡を訪ね歩いている。

【西村さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



大紀町：地域活性化に向けた情報交流、活動拠点の支援を受けている

皇學館大学：岡田登教授（地域の歴史に関する指導）

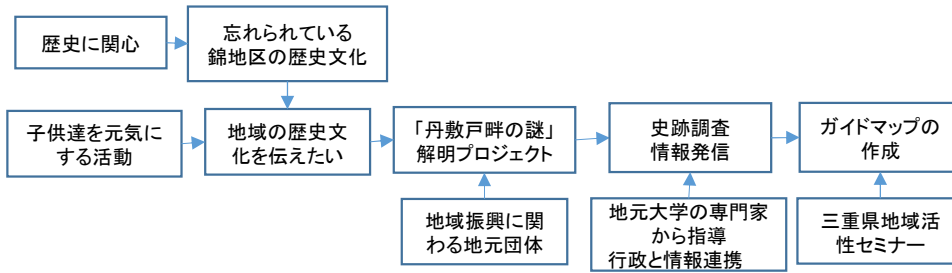
地元商工会：古事にならない、奈良で魚の販売  
 町立錦小学校：地元の歴史を学ぶ児童をサポート

地元活動団体：「アンチョビ・サーデン錦」、「戸畔の会」と地元の歴史発掘の学びと調査連携



### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

西村さんは、地元を活性化する活動の中で、忘れられ消えかけている地元の歴史的資源に関心を持ち、それらを何とか復活させられないかと、歴史の資料を収集し、専門家からの支援も受け、また仲間たちと情報交換しながら学び直しを行っている。元々歴史が好きであり、郷土愛も加わり活動を始めている。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

西村さんが学んだ先は、本やインターネットでの独学と、地域活動にも協力してもらっている皇學館大学の岡田教授から考古学について、その都度、教えていただき指導を受けている。その内容は、古事記・日本書紀など歴史に関すること、地域の郷土誌や周辺地域との関連性、また、地域同士のつながりや歴史、古道の発見等である。また、三重県主催の地域活性セミナーにも多数参加し、地域おこしの知識やスキルを向上させている。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】仲間との交流、新しい発見、知らなかった地元の歴史の事実や価値ある出土品を認識できたこと、その歴史から他地域とのつながりの大切さを知ったことなどを効果として挙げている。

【障壁と改善策】活動のための時間確保や調査のために仕事を休まざるを得ないこと、家族への負担も障壁となった。限界をいつも感じながらの活動だが、いつも協力してくれる人がいること、そして何よりも、困ったことがあるたびに強くなる気がする」と語っている。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

##### ○自分自身に対して

活動を続けることで毎日が楽しい。

グループの交流の輪は、周辺地域だけでなく奈良県にまで広がっており、神話の時代から続く道が今、多くの人々の心を結び付けようとしている。

##### ○地域社会に対して

町でも協力してもらえるようになり、地元の参加者が増え、地域に対する認識が出てきている。

町の人から、次のイベントの予定を聞かれたりするようになっている。

#### 【活動の課題】

○ 県や町からは、専門家の派遣、地図作成デザイナーの紹介、パンフレット作成、企画応募の情報、活動のためのバスの提供など、支援があるが、全くのボランティア活動であり、今後、どのように活動を継続していくかが課題となっている。

○ また、紙芝居を制作できたり保管もできる場所、仲間が集まり情報交換しあう活動拠点の確保も課題となっている。

1 女性の活動概要

活動主体	伊豆田 千加さん（NPO 法人子育ては親育て・みのりのもり劇場理事長）
活動範囲	京都府右京区太秦
連絡先	<a href="http://minorinomori.com/">http://minorinomori.com/</a>
活動の概要	商店街活性化活動（大映通り商店街振興組合協働活動）、地産品のオリジナル食品開発や販売、まちかど映画博物館&地元野菜レストラン「キネマ・キッチン」の運営、近隣幼稚園の延長保育「みのりっこくらぶ」の運営、京都府が推進する地域力ビジネス「京都ちーびず」への参画、地域コミュニティ冊子「右京じかん」（フリーペーパー）の発行など、地元を活性化するための様々な活動をしている。

【プロフィール】

- 2007 年：子育ては親育て・みのりのもり劇場立ち上げ。客観視体験劇の手法を使ったオリジナルの子育てセミナー開始
- 2008 年：子供の体験活動、地域交流手づくり市イベントの定期開催を開始  
子供を真ん中にした地元商店街との連携活動開始
- 2009 年：NPO 法人の認証を受ける
- 2011 年：地元企業・行政・住民をつなぐ活動を展開開始 例) 地元路面電車をペイントした「嵐電パトトレイン」
- 2012 年：地域コミュニティ冊子「右京じかん」（フリーペーパー）創刊
- 2013 年：「キネマ・キッチン」開設



活動拠点、うずキネマ館

2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

【活動の経緯】

伊豆田さんの地域における活動は、2007 年（平成 19 年）、子供らが卒園した幼稚園で、保護者仲間と「親がつくる、親のための、親による子育てセミナー」を開いたことから始まる。

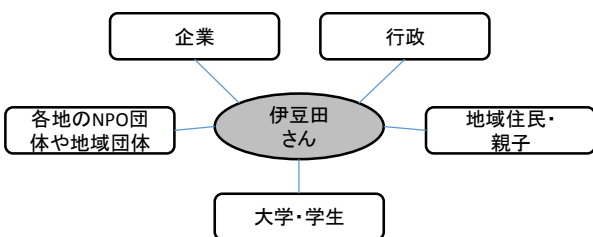
“子ども達の豊かな育ちのためには、大人がまずいきいきと暮らすこと、おとな自身が遊びごころや創造性をもって人生を楽しむことが大切である” という理念を共有する仲間と、「子育ては親育て・みのりのもり劇場」を立ち上げ、活動の対象を「親子」から「地域」へ広げていった。

「子どもには、多様な世代のひと、多様な価値観との出会いが必要であり、地域が子供を育てる。そうして地域と親子を結ぶコミュニティが活性化する。そのためには、さまざまな仕掛けをつくり実践していかなければならない。それが「みのりのもり劇場」の役目だと思っている」と伊豆田さんは語る。

地域のつながりづくりの場として、2013 年（平成 25 年）大映通り商店街の空き店舗に、お母さんの味を活かしたおばんざいバイキング等を提供する「キネマ・キッチン」を開設。その他、地域コミュニティ誌の定期発行、地元の産物を使ったオリジナル加工品の開発販売など、活動は多岐にわたる。

「みのりのもり劇場」の強みは、思いに共感し、考えを共有したことを具現化し、実際に成功を収めているところであり、まさに実践力にある。

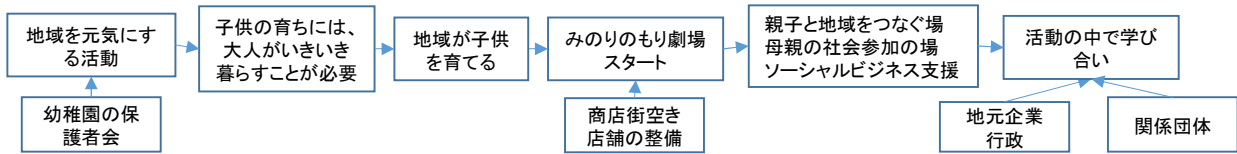
【伊豆田さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



- 企業：地域力ビジネス、地域活性化等の連携
- 行政：まちづくり等の連携
- 各地の NPO 団体や地域団体：情報や活動交流
- 地域住民・親子：重要な活動対象
- 大学・学生：活動のサポート

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

伊豆田さんとその仲間達は、「学ぶために動きを止める」という行動パターンをあまり持っていない。親子と地域をつなぐ活動や、企業・行政・地域をつなぐ活動、子育て中の母親の社会参加の場づくり、ソーシャルビジネス支援など、NPOとして地域と企業をつなぐコーディネーターの役割を果たしていく中で、実践を学びの場としている。「常に本番」という、チャレンジ要素が大きな状況下で、それぞれが得意分野を活かし、適材適所で潜在能力を開花させ働いている。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

伊豆田さんは「日々は学びです」と話す。おかしいな、こうしていけたらいいな…と思うことに対し、思いを共有する仲間と、積極的に活動を実践する。そんな中でさまざまな課題にぶつかるが、それを乗り越えるプロセスの中に学びがある。また、書物により知識や経験を補うことも大切にしており、先達との出会いも、学びの大きな要素となっている。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】学ぶことで自ら気づき、尊敬できる人や考え方との出会い、仲間との学びによる成長の共有などがある。視点に柔軟性を持つことができ、さまざまなことに対応し成功している。

【障壁と改善策】全ての課題は解決のために存在し、困難な課題であればあるほど成長のチャンスと捉えつつ、柔軟な発想を武器に独創性のある案件を仕掛けている。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

#### ○自分自身に対して

自らの気づきや尊敬できる人物や考え方との出会い、仲間との学びと成長の共有があった。

「想いをカタチにする」実践活動を、楽しみつつ懸命に行う姿を家族に見せることで、自身やスタッフの子供たちの自主性、主体性、柔軟性、発想力、創造力の育成につながっている。

#### ○地域社会に対して

商店街の活性化活動においては、来街者の増加や来街層の多様化などの効果があらわれているが、「地域が変わった」と言うにはまだ早く、今後の継続的かつ根気強い活動が必要だと思う。みのりのもり劇場の活動にふれ、やりたかったことを実行に移す人、子供との接し方が変わったと言われる親御さんなど、変化を実感できる事例はある。また、企業への積極的働きかけにより、「地域とつながる企業のあり方」を意識し、実践する企業も増えてきている。

#### 【活動の課題】

- みのりのもり劇場は「地域を元気にしたい、子供が健やかに育つまちであってほしい」と願っており、その未来像を実現するためには、行動の「継続」が重要だと考えている。だれでもスキルアップできる能力を持っている。地域の中に元気な人を増やすには、その人が自分もつ能力を地域に役立てたいと思った時、活かせる仕組みがあること。そして「継続」を見据えれば、ボランティアではなく、対価がもらえる「事業」という仕組みが必要となる。
- 育児等からの社会復帰を望む女性は何らかのスキルや資格を習得しようとする場合には、保育施設や一時預かりなどの環境整備の充実は必要。
- 多様な働き方ができる社会のあり方や、自らそのような場を創出しようとする「人」を支援する体制をつくることも重要。環境によって輝く人もおり、人材適用のコツはいかに楽しく人が集まれる場所、活躍できる場を提供できるかだ。

## 1 女性の活動概要

活動主体	よしおか 吉岡 まち子さん（おやこフィットネス神戸代表）
活動範囲	兵庫県神戸市中央区
連絡先	m.yoshioka@oyakofitness.com
活動の概要	親子フィットネス教室は、妊娠、出産、育児で姿勢や体型が崩れ、いつの間にかストレスが溜まっている子育てママを対象に、トータルでサポートするエクササイズの教室である。また、現在、40歳前後の出産経験者女性を対象に、40代に必要な運動をすることで素敵な50代を目指すプログラムも行っている。メンバーは6名である。

## 【プロフィール】

2009年：関西学院ハッピーキャリア（女性のための再就職起業支援）プログラムを受講  
 2010年：おやこフィットネス教室スタート  
 2011年：マタニティビクスインストラクター資格を取得  
 2014年：講師養成を開始  
 一般社団法人日本マタニティフィットネス協会認定インストラクター  
 日本体操協会新体操競技公認審判員



おやこフィットネス教室

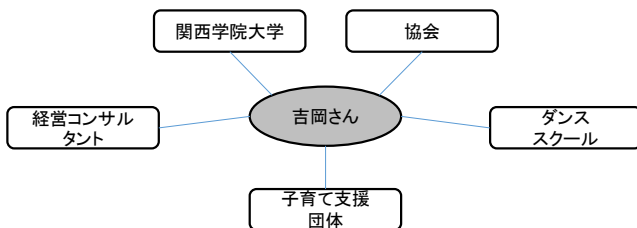
## 2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

## 【活動の経緯】

吉岡さんは、幼少期より運動神経が人並み外れて鈍かったが、高校時代に“変わりたい”と願い、一念発起し新体操部へ入部。これが転機となった。その後大学のダンスサークル、社会人になってからはダンススタジオでレッスンを受けた。その後結婚、忙しさのためダンスの楽しさから遠ざかり、2人目出産後、ママ友と“ダンスサークル”を始める。そのきっかけは、ママ達が参加していたエクササイズの教室がなくなってしまったことであり、“それじゃあ自分たちでやろう！”となった。

ダンスサークルは月3回、昔習ったことを思い出し、TVやDVDで勉強しながらの指導だった。より、専門的な指導をしたいとアフタービクス、ベビービクスの資格取得の学びを行う。また、子育て中の女性が元気になる仕事がしたいと思うようになり、女性のための再就職起業支援プログラムを受講し、サークル活動的だったダンスサークルも、“おやこフィットネス教室”として、専門的知識やスキルを持ったメンバーが職業として指導する体制を採用している。

## 【吉岡さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



関西学院大学：女性のための再就職企業支援プログラムをとおして情報入手

協会：フィットネス、新体操等の情報入手

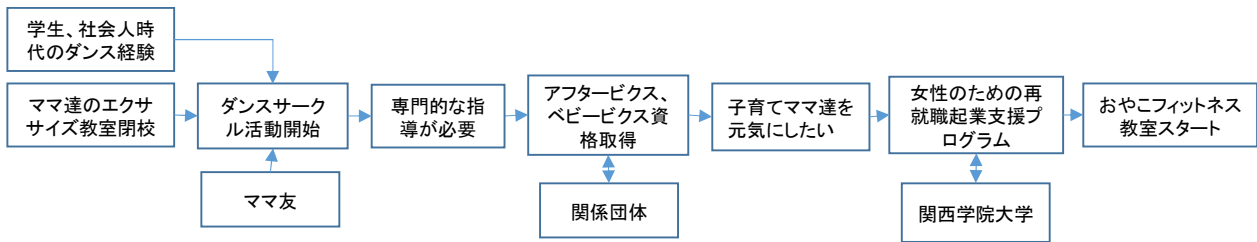
経営コンサルタント：企業を経営の指導を受ける

ダンススクール：各地のダンススクールと情報交換

子育て支援団体：神戸市内の団体やと親子支援、母親支援に関する情報交換

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

吉岡さんはママ友同士でスタートしたダンスサークルを、より専門的な知識、スキルを得たいと学びなおし、資格を取得し、さらに女性の職業とするために学びなおしを行っている。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

高校、大学と続けたダンスをベースとし、子育て中の女性が元気になる仕事がしたいとの思いから、マタニティビクスインストラクター資格取得のための学び、また、女性のための再就職起業支援プログラムを受講している。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】専門技術習得による自信と新たな働き方の発見があり、やりたいことと何のために働くのが明確になった。また、仲間との交流が生まれ、スケジュール管理をしてやり遂げたことで自己評価が上がっている。学びの中からアクションプランを作成しそれが起業につながっている。

学びの中で自分のしたいこと（運動を通じて親子の健康を応援する）や、働く目的（自律・自立）、目指す働き方（雇用ではなく起業する）を発見し自覚できている。

【障壁と改善策】吉岡さんは、ダンスサークルでは子供連れで参加したが、時間の確保が困難だった。学ぶことは新たなチャレンジにもなるが、精神的不安もあった。家族や仲間たちの協力でカバーできた。特に家族へは、夫にプレゼンをすることで経済的援助を受け、また親から子育て協力も得られたと語っている。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

##### ○自分自身に対して

自分ですべての責任を取ることへの覚悟ができたこと、また、家族へは働く楽しさを伝えられた。夫には共通理解を、子供には将来展望を与えられたと語っている。

##### ○地域社会に対して

年間延べ 2400 組の親子が参加しており、産前産後、乳幼児期の運動の大切さを伝えられていると思っている。また、教室は子育て仲間をつくる場になっている。

#### 【活動の課題】

- 吉岡さんの活動は、家事育児との両立や拠点の確保や事務的な手続き等雑務にも手間をとられるなど、ビジネスとして継続していくために、問題は多岐にわたる。そのためのビジネススキルなどの学びの場が必要。
- ある意味の限界を感じているときに、教室運営に知識を持つ会社からオファーを受け、連携に踏み切っている。
- それにより、運営面での事務的な負担が軽減しており、経営に関する継続的な学びの場の必要性を感じている。

1 女性の活動概要

活動主体	しげみ みよこ 茂美 美代子さん（板野町まちづくり女性の会代表）
活動範囲	徳島県板野町
連絡先	
活動の概要	“板野町まちづくり女性の会”は、町の広報誌で「行政への提言や女性目線での取り組みを町を上げてバックアップします」と言う公募で結成される。事務局を教育委員会に設置し、生き活きた魅力に満ちた町づくりを目指し、会員相互連携と親睦を深めつつ、行政への提言、子育て支援、さまざまな分野における活動に寄与することを目的としている。現在、会員は90名である。

【プロフィール】

- 2002年：徳島女性農業経営者ネットワーク（ゆめネット）企画委員
- 2008年：農山漁村女性全国リーダー研修会参加  
アグリウエルカム塾入門（基礎コース）
- 2009年：女性農業者のための経営参画支援相談員研修参加
- 2011年：板野町まちづくり女性の会入会
- 2013年：板野町まちづくり女性の会と産業課にて  
6次産業化商品開発（化粧品開発）
- 2015年：板野町地方創生総合戦略会議参画



まちづくり女性の会メンバー

2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

【活動の経緯】

茂美さんは、農家へ嫁いだことで「自分は何も知らない」と気づき、家族や地域から様々な事を、その時その場で学んできた。

板野町まちづくり女性の会への参加は、農業を学んできた延長線上であり、地域と共にある農業を考えれば、希薄になりつつある地域を活性化させるにはどうすればよいかを見つけるためであった。

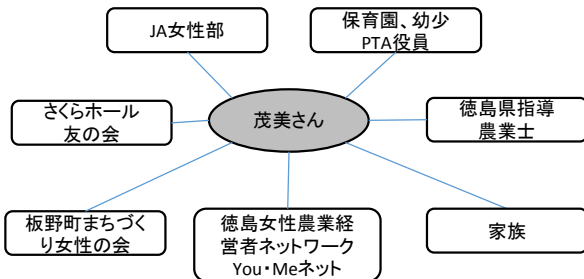
会の参加は、人参専作農家ということで、自由な時間（4ヶ月以上）が取れたことにより、活動環境が整った面も大きかった。

会の活動は、アンケートをとるところから始まり、町の史跡めぐりや議会の傍聴から始まったが、2年目になると参加者が激減し、継続して会に興味を持ってもらうために、産業課からの提案があった6次産業化の商品開発に取り組むことになった。

現在、人参ドレッシング、人参エキス配合ハンドクリーム開発や販売を行っている。

月1回の定例会や役員会、不定期のハンドクリーム部会、会主催の「お話セミナー」「ひな祭り」、町主催の各種イベントへの参加など多忙である。

【茂美さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】



JA女性部：農協を通したお隣とおつきあい

保育園、幼少PTA役員：子供たちの学校関係

さくらホール友の会：町のホールを活性化する会

徳島県指導農業士：県認定

徳島女性農業経営者ネットワーク You・Me ネット：

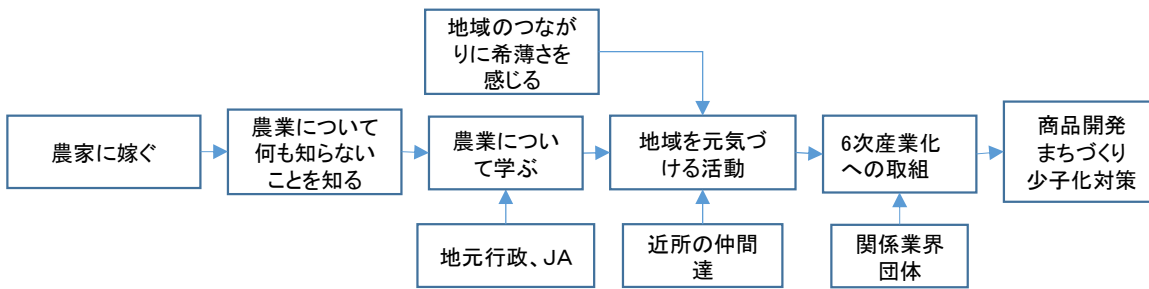
女性農業者として資質向上を目的とする会

板野町まちづくり女性の会：町へ様々な提言や協力

家族：同居している家族やしていた家族

### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

茂美さんは、農家へ嫁いだことで「自分は何も知らない」と気づき、知りたい、学びたいと、女性農業経営者研修会や農村漁村生活改善、アグリレディースパソコン講座など、様々なことを学んだ。

また、ゆめネットで学んだ「発信することの大切さ」を、地域に展開するにはどうしたら良いかと模索したとき、まちづくり女性の会の活動をとおして多種多様な女性たちと繋がるとういう考えに至った。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

農業について学んだ先は、地元行政やJA、県や関係業界の研修など多数で、板野町まちづくり女性の会入会後は、女性・高齢者等活動支援事業や6次産業化商品開発、化粧品開発、板野町地方創生、少子化対策等について新たな知識、スキル等を得ている。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】人との出会いが人生を豊かにしてくれた。農業経営に関しても、学び知ることにより、目標ができ、計画を立てることもできる。そして、後継者へ胸を張って渡すことができるようになった。

また、県内外の女性農業者との交流で日本の農業や政治的なことへ関心が向くようになったことなどを挙げている。

【障壁と改善策】学びの期間と農業活動とが重なることもあった。家族の理解、時間の余裕、自由に使えるお金、自分を理解応援してくれる仲間、行政のきっかけ作り、そして、学びへの意欲と楽しむことが必要。押し出す力（家の中から）、引き出す力（家の外から）、自ら出る力（歩み出す）が必要と語っている。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

#### ○自分自身に対して

人参農家としてニンジンエキス入りハンドクリームが出来上がり、また、活動をとおして、町内のいろいろな人と知り合いになれた。

農業関係その他、学んだことは、経営規模の拡大につながっている。

#### ○地域社会に対して

商品開発をとおして活動は知られていると感じるが、効果としては不明。

#### 【活動の課題】

○まとめ役としての重責や個性の異なる仲間との間で疲れも感じており、メディアに取り上げられたり、行政の評価委員として参加したり、仕事との両立に苦勞している。

○共働する仲間との人間関係、年代、興味、仕事の相違を超えて共働し製品開発をする大変さを知り、相手への理解が大切と感じている。

○時間とお金のゆとり、そして家族の理解など、自分を認めてくれる人たちの存在が活動に欠かせないと語っている。

1 女性の活動概要

活動主体	矢野 圭夏さん（鹿児島ウーマンライフ研究会代表）
活動範囲	鹿児島市を拠点として県域全体
連絡先	
活動の概要	「鹿児島ウーマンライフ研究会」は、社会で女性が自分らしく活躍できることを目指して、鹿児島県男女共同参画センター主催の講座修了生を中心に2011年に結成された。好きな活動や仕事をしている女性たちが集まり、多様な人生を認めあえる居場所づくりをめざしている。現在の会員数は約50名。

【プロフィール】

1979年：大阪市生まれ。  
 2002年：大学を卒業後、OA機器販売会社へ就職。  
 2008年：大阪・東京でのキャリアを経て、ライターを目指し退職、結婚を機に鹿児島へ。  
 2011年：女性の仕事とキャリア支援を目的として、鹿児島ウーマンライフ研究会結成。人材育成コンサルタントとしての業務を行っている。  
 整理収納アドバイザー1級、米国NLP協会認定NLPマスタープラクティショナーの資格を持つ。



研究会の様子

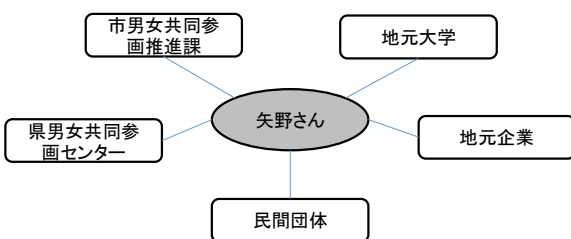
2 活動の経緯と周囲の人的ネットワーク

【活動の経緯】

幼いころから自己主張が強く、人の持つ個性や視点にわくわくする性格だった矢野さんは、自分の体験や感じたこと考えたことを語り合い、発信することが好きだった。大学卒業後、OA機器販売会社へ入社し、大阪で3年半の販売促進業務を経験した後、さらなる活躍の場を求めて東京本社へ自ら異動願いを提出し念願の東京生活を送ることになるが、大阪時代とは全く異なる環境に置かれ、情報とは無縁の忙しさの中で東京での社会人生活に疑問を感じ、次第に自分の得意なこと“人に伝える仕事”で生計を立てたいと思うようになる。そして入社5年目「好き」を仕事にしようと退職し、1年間ライタースクールでひたすら書くことを訓練し、フリーライターの道を歩むことになる。

その後、結婚を機に鹿児島に移ることになるが、東京での仕事を中心とした生活から、何かをしたくとも何もすることがないという悶々とした生活の中で、まずは地域に溶け込もうと行政主催の講座に参加したことがきっかけで、広報誌の編集サポーターというボランティア活動に出会い、男女共同参画の概念に触れる。この広報誌づくりが矢野さんの現在の活動のスタート点であり、企画・執筆・編集という作業は、矢野さんが東京で目指していた分野と重なったことから、ようやく鹿児島での自分の居場所を見出すことにつながっている。その後、社会保険労務士事務所で働くようになり、鹿児島という保守的な地域性の中で、働く女性のスキルアップや仲間づくりの必要性を強く感じるようになり、鹿児島県男女共同参画センター主催の講座受講生を中心に、「鹿児島ウーマンライフ研究会」を立ち上げ今日に至る。2013年に鹿児島市から委託を受け、鹿児島市初の女性起業スクールを企画運営したことをきっかけに、現在、力をいれている起業支援に取り組むことになった。

【矢野さんを取り巻く人的ネットワーク、つながり】

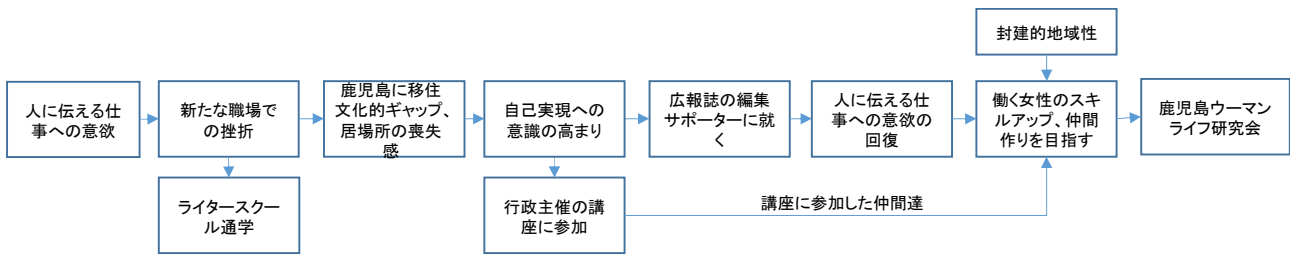


鹿児島市男女共同参画推進課：活動に対するアドバイスや情報交換  
 地元大学：活動に対する助言、指導  
 県男女共同参画センター：活動に対するアドバイスや情報交換  
 地元企業：女性就業に関する情報交換  
 民間団体：女性就業に関する情報交換



### 3 女性の社会参画のプロセス

#### 【学びと社会参画に関するプロセス図】



#### ○学びから活動への経緯

会社勤めや主婦という限られた生活範囲では、社会とのつながりや自己成長が得られないと思ったため。また、夫の転勤により今後もまたキャリアが断たれてしまう可能性もあり、「どこにいても自分でできる仕事」を身につけたいという思いが学び直しを後押ししている。自分が置かれた環境から、「やりたい」と願うことが来年できるか分からない状況だと痛感し、とにかくやりたいことはすぐにやる、学んだことは活用する、という意識から活動が加速していった。

#### ○活動を推進するための学び（交流、学習）の内容

退職後のライティング、鹿児島での男女共同参画、簿記3級、整理収納アドバイザー1級、NLPマスタープラクティショナー等の学びと資格取得をしている。

#### ○学びを通じた変化（効果）、学びの障壁と対応

【変化（効果）】矢野さんにとっての効果は、同じ問題意識を持つ仲間や、目標達成に向かう仲間が得られたことや、所属や肩書でなく、自分の名前ですべてに価値提供ができる自信ができたことを挙げている。

【障壁と改善策】家族からの応援もあり、学ぶことへの障壁は感じることは無かったとしているが、女性が「仕事」の面で認められるためには覚悟や努力が必要とも語っている。そして自分自身、こうした覚悟や努力を身につけるために、学びにおいては学んだことを活用する場面（アウトプット）を前提にインプットすると語っている。学びの弊害として、ともすれば自分と他者との関係性を上下に置いてしまいがちだが、常にWIN-WINとなるように相手の立場を尊重し、寄り添い、協力体制をつくるのが、特に女性の学びにおいて重要だと、実体験を通じ感じている。

### 4 活動の成果と課題

#### 【活動の成果】

##### ○自分自身に対して

現在の活動は、自分と社会とが繋がる手段であり、社会貢献や自己実現のために効果があるとしている。

##### ○地域社会に対して

活動は地域社会にとって女性のエンパワーメント、活躍の場づくり、ロールモデルづくりに貢献しているとしている。男女かかわらず、幼いころから人生の選択肢や可能性を知ることが、結果として自分の人生を選んで生きることになるとしている。

#### 【活動の課題】

○地域性から、女性が表舞台に立つ歴史が浅く、能力があっても良い活動をしている人や団体が脚光を浴びることが少ない。しかし、情報発信が容易に行われるようになったことで、これらの点も徐々に改善されている。

○自分自身、講座への参加が活動のきっかけとなったように、行政との協働や職員とのコミュニケーションを確保できたことも課題改善の要因となっている。